平成 30 年度

自己点検評価報告書

目　白　大　学

大　学　院

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	飛田　満	

(1)特筆すべき事項
＜教育・研究・社会貢献＞
①前年度に引き続き、平成30年度ＦＤ活動の目標として「研究科全体による論文指導体制の強化」を掲げ、年間を通じて研究科を挙げて論文指導のあり方を検討した。
②7月28日に修士論文中間発表会を、2月2日には最終試験を公開で開催した。1年生から学生全員の出席を義務づけ、教員も多数出席してコメントやアドバイスを与え、活発な質疑応答と意見交換をおこなった。
③研究科を挙げた全体指導の強化と並行して、いわゆるゼミ（「国際交流研究演習」「修士論文指導演習」）を中心として、研究の進め方や論文の書き方に関する様々なレベルでのきめ細かな少人数・個別指導も徹底しておこなった。その結果、２年次・過年次生18名中15名が修士論文を提出、14名が試験に合格して課程を修了した。
④社会貢献及び地域連携活動の一環として、また国際交流事業に関する共同研究・研修の場として、国際交流研究科「第４回公開講演会」を開催した。ESD活動支援センター副センター長・国連大学サスティナビリティ高等研究所上級客員研究員の鈴木克徳氏を講師に迎え、「SDGs（持続可能な開発目標）をめぐる内外の動向～今、私たちはSDGsとどう向き合うべきか～」というテーマで講演を実施した。本学学生・院生と一般市民を合わせて140名を超える参加者があり大盛会であった。
⑤社会学部地域社会学科主催「第11回地域フォーラム」を共催し、研究科の学生にも出席を促した。

＜組織マネジメント等＞
①オープンキャンパスで４回、進学相談会で５回、受験生対応を実施した。
②平成31年度入試は入学者８名であり、そのうち多くが中国人留学生であった。質の確保を優先したため前半で絞り込んだが、後半で想定外の辞退者４名が出て、不本意な結果に終わった。
③入試広報部の支援により学生募集のための研究科紹介チラシを制作し、関係先に配布・送付、学内にも配置した。
④合格した修士論文を製本・管理するとともに、すぐれたものについては要旨を目白大学ホームページ上で公開している。
⑤１名の論文指導補助教員が論文指導教員に昇格した。マーケティングを専門分野とし学生のニーズが高い。

(2)今後の課題
＜教育・研究・社会貢献＞
①研究科全体による論文指導体制の強化に今後も取り組み、論文指導担当教員のきめ細かな個別指導と中間発表・最終試験における全教員による指導をさらに徹底する。
②修士論文最終試験で合格判定を出したものの、一部論文の質やレベルの点で必ずしも十分ではないものがあり、論文指導担当教員のより厳しい指導が望まれる。
③修士論文最終試験には１年生の出席も義務づけているが、中国の春節の時期と重なって欠席する者が多く、出席するよう今後も指導を徹底させていく。
④重要な連絡や緊急の連絡のための研究科学生用メーリングリストへの学生の登録がルーズになっており、登録するよう繰り返し指導をおこなっていく。
⑤学生・教職員・一般市民を対象とした国際交流研究科「第５回公開講演会」を開催する。環境・経済・社会問題の分野における実務家等を講師に招き、国際交流・協力事業の現状と課題について理解を深める。
⑥大学院生の就職活動を支援するために、キャリアセンターとの連携や修了生・同窓生とのネットワークの構築を図る。
⑦研究科構成員の研究活動や社会貢献活動の成果の情報発信に関して、学園ウェブサイトを活用して積極的におこなわれるように引き続き働きかけていく。

＜組織マネジメント等＞
①社会学部２学科をベースとし、社会学部の専門教育に連接させた国際交流研究科の新体制の確立とカリキュラムの改訂について検討を開始したが、このカリキュラムの改訂には教員組織の変更がともなうため、直ちにこれを進めることができない。そこで当面はカリキュラムの部分的見直しが現実的と考えて進めていく。
②国際交流研究科は、中国人留学生が大多数を占め、定員充足も難しくなってきた。国際交流研究科であるから、留学生を積極的に受け入れることに問題はないが、今日社会のグローバル化、少子高齢化、高度情報化が加速し、また社会貢献、生涯学習、産学連携等が求められる中、これまで以上に多様な層の学生をターゲットに、そのニーズに応えられるユニークな国際交流研究・教育の可能性の模索と、それを具体化するカリキュラムの再検討や開設科目の見直しが必要である。
③国際交流研究科は、言語文化専攻が外国語学部４学科をベースにした言語文化研究科として独立したのを機に、国際交流専攻が社会学部地域社会学科をベースにした（新）国際交流研究科として再編成されたが、その後、地域社会学科所属の論文指導教員の退職が続き、また学部教育と大学院教育のバランスや兼担を義務とする体制の足枷から、次第に持続可能な研究科運営が難しくなってきた。大学院教育へのコミットメントに温度差がある中、教員組織の再編成も必要である。
④厚生労働省教育訓練支援給付金制度も活用しながら社会人学生を確保するとともに、本学の卒業生、他大学の新卒生、リタイア世代、主婦など、異文化交流や多文化共生の問題に関心を持つ多様な層からの掘り起こしを図る。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(修士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	国際交流専攻
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 (評価単位責任者)	職　　名	専攻主任	
	氏　　名	上田　昇	

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・修士論文の中間発表(2018.7.28)では諸教員からのコメント・アドバイスが論文作成指導に有益だった。最終試験(2019.2.2)では活発な質疑応答がなされた。 ・春学期に教員と学生の個別面接を行い、学生による希望票に基づいて１年次秋学期履修の課題研究の指導教員の決定を行った。 ・留学生には日本あるいは日本と母国に関する比較研究をなるべく行うよう勧めている。 ・修士論文のうち優秀なものについては、要旨を本学の公式ウェブサイトで公表している。 (2) 今後の課題 ・学生が他学生の発表内容に関心を持ち、中間発表や最終試験の場で質疑に加われるようにして行きたい。 ・留学生同士が教室では日本語で会話することを促す。 ・臨地研究を推奨する。
学生指導	(1)特筆すべき事項 特になし (2) 今後の課題 ・就職を希望する学生に対する助言・支援の体制を整える。 ・留学生が多いので学園生活や履修方法などについてきめ細かな指導が必要。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 国際交流研究科第4回公開講演会を開催した（日時：7月14日、テーマ：SDGs(持続可能な開発目標)をめぐる内外の動向、講師：ESD活動支援センター　鈴木克徳氏） (2) 今後の課題 ・継続的に国際交流に関するプログラム（講演会等）を推進する。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・研究科紹介のチラシを作成・発行 (2) 今後の課題 ・就職を希望する学生に対する助言・支援の体制を整える。 ・就職先については学位授与式時に確認しているが、その後のフォローが難しい。 ・アルバイトの状況もできるだけ具体的に把握できるようにする。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2) 今後の課題 ・修了生の就職先などの情報を取得できるようにする。 ・修了生との交流の輪を広げる。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	心理学研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	小池　眞規子	

(1)特筆すべき事項
【教育】
①現代心理学専攻・臨床心理学専攻ともに修士論文指導に力を入れ、成果を得た。
【学生指導】
①各専攻とも入学者数が減少している。
②現代心理学専攻、臨床心理学専攻ともにそれぞれの心理専門資格取得に向けた対応を図っている。
【社会貢献】
①各教員は、それぞれの専門分野において、研究およびその実践による社会貢献を行っている。また、心理カウンセリングセンター相談員としての心理相談活動、新宿区との提携による小中学校、特別支援学校等への巡回指導などの地域貢献を行っている。
②大学院修了生の中に、発達障がい児の支援施設を立ち上げるなど、大学院での知見を得て社会に貢献する人たちが出ている。
【組織マネジメント】
①各専攻とも入学者の減少が続いており、研究科として入試対策の具体的検討を行った。
【その他】
①公認心理師養成の現状把握と指導体制の検討をテーマに、3回の研究科FDを実施した。
②研究科講演会を行った。
　日時：2018年11月17日（土）　15時30分～17時30分
　内容：公認心理師のこれからの展望
　講師：跡見学園女子大学教授　野島一彦先生
③2018年の第1回公認心理師資格試験合格率は100%、臨床心理士資格試験合格者は68.5%であった。

(2) 今後の課題
【教育】
①新学部学科構想と関連し、学部からの大学院進学者、とくに公認心理師養成に伴う進学者の選抜をどのように実施していくかの具体的な検討を早急に行う必要がある。
②さまざまな背景をもつ社会人学生への対応を検討する。
【学生指導】
①大学院修了後のキャリアパスについて検討と指導が必要である。
【社会貢献】
①毎年実施している研究科講演会について、外部に向けた実施の可能性を検討する
【組織マネジメント】
①各専攻とも入学者の減少が続いており、研究科として入試対策の強化を図り、各専攻で具体的な検討を行う。
【その他】
①授業の昼夜開講制と、入学定員については、各専攻の事情を考慮し，具体的な対応を継続して検討する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	現代心理学専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	専攻主任	
	氏名	小野寺　敦子	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ①2018年度の現代心理専攻の卒業生は11名であった。全員、一生懸命に研究に取り組み一定の評価ができる修士論文を執筆することができた点は評価できよう。これは現代心理学専攻に属している各教員の指導によるものであるといえよう。 （2）今後の課題 ①臨床発達心理士の受験資格に必要な科目を本学科では10科目用意している。しかし200時間の外部での実習が必要である資格であるため、実習先確保をどうするかが今後の課題となる。 ②2018年に入学してきた院生は社会人が6名いた。そうした社会人に対する授業の開講時間の問題、構想発表の時期などで新たな課題もでてきていた。 ③M1のゼミ選択の時期が現在５月中旬になっており、単位として換算されていない。今後はもっと早くからゼミを決めて単位として認めて行った方が良いのではないかと思われる。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①2018年そして2019年と入学者が減少している。特に2019年度4月の入学者は4名となってしまった（合格者は6名出していたが、手続きをした人が4名であった）。また、この2年間は目白大学学部生からの受験者が激減しているという問題がある。 ②院生のうち、臨床発達心理士の受験資格を希望する学生が毎年かなりいる。 今年は4名の入学者のうち3名は希望している。シニア産業カウンセラー受験資格を希望する院生は少ない。 （2）今後の課題 ①本学の学部から現代心理学専攻に入学してきた学生は昨年、同様に１名という状況であった。次年度は内部の学部学生に対して現代心理学専攻の教育内容等を説明する機会を増やし、内部からの進学者を増やすことが課題である。 ②近年、臨床発達心理士の受験資格を目的に本専攻に入学してくる院生が増加してきている。平成29年度には10名の院生中、6名は本資格を取りたいという状況である。引き続きそうした院生への実習先紹介や資格内容の紹介を行っていく必要がある。③一般就職を希望している院生に対しての就職指導を強化することは今後の課題である。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 卒業生に臨床発達心理士の資格をとりその資格を使って発達障碍児の支援や施設を立ち上げている人などもおり、大学院での知見を使って社会貢献している人たちもたくさんでてきている。 （2）今後の課題 現代心理学専攻主催の講演会などを今後企画し実施する必要があるだろう。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①現代心理学専攻に所属している専任教員は8名である。原教授は、2019年度で定年退職の予定であり、大嶋専任講師は研究指導はまだ行っていない。また2020年度より犯罪心理学領域の教員が現代心理学専攻に所属予定である。 ②2018年度は、現代心理学専攻の今後の方向性と特徴をどのようにして出していくかを検討する必要がある。 （2）今後の課題： ①入試への対応：社会人の志願者を増やす工夫を行う。②目白の内部生に対しての広報を考える。③大学院のウェブサイトに現代心理学専攻の情報をたくさんあげるようにしていく。④各教員の専門性や研究成果をウェブなどで発信していく。⑤他の学科との科目などの連携を深める。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	臨床心理学専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	専攻主任	
	氏名	田中　勝博	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 臨床心理学専攻では，修士論文作成にあたり，実証研究促進のために新たなカリキュラムを作成し，学生の指導を行った。また，公認心理師の養成のために，講義内容および実習プログラムの見直しを図り，新たなカリキュラムを導入した。 (2)今後の課題 新たなカリキュラムを導入して，修士論文作成がスムーズに行われており，公認心理師・臨床心理士などの資格試験に向けて，早期より準備を行うよう体制を整えた。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①1年次入学者より公認心理師資格対応カリキュラムを実施したことに伴い実習時間が増え，公認心理師養成実習指導について，新たに臨床心理学実習支援室を立ち上げ指導を行った。 ②臨床心理士・公認心理師試験対策として，平成29年度修了生2名による合格体験講演会を実施した。 日時：2019年3月13日（水）　18時30分～20時00分 講師：竹内美咲氏 竹前翔太郎氏 (2)今後の課題 公認心理師および臨床心理士として，臨床現場に出て即戦力となるような指導体制を形成していくことが望まれる。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①臨床心理学専攻の教員は全員が本学心理カウンセリングセンター相談員を兼ねており，センターに来談するクライアントのカウンセリングや　心理療法の担当を通じての社会貢献を行っている。 ②心理学系の学会や地域などの講演会，公開セミナーの講師なども務め，社会貢献している。 (2)今後の課題 より多くの優秀な国家資格である公認心理師を育てていくことが，大きな社会貢献となるので，教育および実習の充実などを図っていくことが望まれる。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 受験者数が減少傾向にあり，今年度は12名合格中7名しか入学しなかった。次年度から，入試日を早めるなどの対応を取ることとした。 (2)今後の課題 入学者数の減少に対して，入試日の変更の対応だけではなく，内部推薦枠を作ることや奨学金制度を設けるなど，大学院専攻の魅力を作ることが望まれる。
その他	(1)特筆すべき事項 ①昨年度の専攻修了者の公認心理師資格試験の合格率は100％であり，臨床心理士資格試験の合格率は68.5％であった。 ②科学研究費補助金への積極的な応募，その研究成果の発表が行われている。 (2)今後の課題 ①研究成果の共有の機会については，今後，検討を行って行く必要がある。 ②昼夜開講制は，（現役の）学生のニーズが低いこと，教員の負担が重過ぎることなどデメリットが多く廃止すべき時期に来ている。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	心理学研究科(博士後期課程)
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 (評価単位責任者)	職　　名	研究科長	
	氏　　名	小池　眞規子	

自　己　評　価　※箇条書きにて記入
(1)特筆すべき事項 ①入学者は1名であった。 在籍者は1年次1名、2年次1名、4年次以上1名(休学)ある。 ②2名の退学者があった。 ③研究指導体制は、研究指導教員5名、研究指導補助教員1名である。 ④学則の変更を行った。 研究指導科目である社会心理学、発達心理学、健康心理学、カウンセリング心理学、臨床心理学の5領域に合わせて特殊研究科目の見直しを行い、社会心理学特殊研究、発達心理学特殊研究、カウンセリング心理学特殊研究については現行通り、精神医学特殊研究を研究指導科目名と合わせて健康心理学特殊研究と名称変更し、医療心理学特殊研究は削除して臨床心理学特殊研究において医療領域を取り扱うこととした。 ⑤修士課程学生の論文指導補助として、博士課程在籍学生1名および修了者(学位所得者)1名をTAとして採用した。 (2)今後の課題 ①1年次における本学紀要への投稿とともに、学会出席、学会研究発表、日本学術会議所属学会誌への計画的投稿を積極的に行うよう指導する。 ②博士課程在籍中に学位請求論文を完成させるように引き続き指導していくとともに、過年次生の学位取得に向けての指導を行う。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	平林　隆一	

(1)特筆すべき事項
・修士課程の受験者数が増加してきており、学力レベルも上がってきている。また、博士後期課程の受験者も継続的にいる。
・社会人、留学生の受け入れを考慮した時間帯に授業を設定することで幅広い学生の受け入れを可能にしている。

(2) 今後の課題
・社会人学生および日本人学生の増加を見込めるような魅力ある授業を実施すると同時に、博士後期課程では、最先端の研究を指導出来る教員間の研究制度、教育制度、人事制度を確立することが必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	経営学専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	専攻主任	
	氏名	伊藤　利佳	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・受験者数が増加してきており、学力レベルも上がってきている。 ・社会人、留学生の受け入れを考慮した時間帯に授業を設定することで幅広い学生の受け入れを可能にしている。 ・今後の研究生活に役立ててもらえるようデータベース講習会を開き、海外の幅広い知見に触れる機会を設けている。 (2) 今後の課題 ・社会人学生および日本人学生の増加を見込めるような魅力ある授業の実施。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・アルバイトをしている学生が多いため、授業や研究とのバランスをとるよう指導。 （夜間など無理な時間帯、時間数などは避けるように指導。） (2) 今後の課題 ・特別に問題になる事案は発生していないが、今後留学生が増えた場合には、さらにきめ細かい対応が必要になる。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・学会のコミッティー活動や論文査読の実施。 (2) 今後の課題 ・大学以外と連携した活動（地域や企業など）を実施する。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・研究科の運営は専攻主任、研究科長を含む全ての教員の協力で成り立っている。そのため、大学院関連の行事に専攻主任および研究科長が率先して動くことによって、他の教員が快く協力してくれる体制になってきている。 (2) 今後の課題 ・できるだけ合理化を図り、効率的な運営を目指したい。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2) 今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	経営学研究科(博士後期課程)
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 (評価単位責任者)	職　　名	研究科長	
	氏　　名	平林　隆一	

自　己　評　価　※箇条書きにて記入
(1)特筆すべき事項 ・ここ数年は、品質管理、統計解析系の博士課程の学生であったが、財務会計の博士後期課程の合格者がでた。 ・社会人、留学生の受け入れを考慮した時間帯に授業を設定することで幅広い学生の受け入れを可能にしている。 ・今後の研究生活に役立ててもらえるようデータベース講習会を開き、海外の幅広い知見に触れる機会を設けている。 (2)今後の課題 ・社会人学生および日本人学生の増加を見込めるような魅力ある、研究能力の高い教員の確保と教員の養成。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	六波羅詩朗	

(1)特筆すべき事項
【生涯福祉研究科の取り組み】
①ワーキンググループによる検討
生涯福祉研究科の入学生の増加を目指して、2年前から研究科の課題を討議するワーキンググループを設置し、今年度も継続した。今年度は、前年度に各教員が調べて報告した他大学大学院の状況等を踏まえて、具体的な入学制度の検討、とりわけ入試形態の検討や入学試験の方法などの検討を進めたが、具体的な内容については次年度の適用を踏まえてさらに検討することとなった。

【生涯福祉研究科の周知を図る取り組み】
①□生涯福祉研究科主催の公開シンポジウムと公開講座
今年度は、生涯福祉学研究科2018年度公開講義として、2018年11月19日（月）は、「保育士の量的確保と保育の質の確保」の可能性を問う～新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領施行の今～」というテーマで前東京家政大学教授　前目白大学大学院生涯福祉研究科非常勤講師（湘南ケア アンド エデュケーション研究所所長）の増田 まゆみ 先生にお願いした。また、その後では、第2回の公開講義として、2019年1月16日（水）に 「わたしたちの人権と社会正義について語ろう」というテーマで、前二本社会事業大学大学院教授(本学生涯福祉研究科非常勤講師) 北島 英治 先生に講義をお願いした。それぞれに回によって参加者の多少はあるが、大学院卒業生、他大学の院生や現場の職員、本学院生など、多彩な顔ぶれで、充実した内容と質疑応答が行われた。
②□人間福祉学科および子ども学科の卒業生に対する大学院紹介のＤＭを配布
人間福祉学科は、卒業生対象に送付しているニュースレターに「生涯福祉研究科の紹介及び入学のお誘いリーフレット」を同封して送付した。子ども学科においても卒業生に「生涯福祉研究科の紹介及び入学のお誘いリーフレット」を配布した。
③ 研究会･フォーラム・研修会などへの協賛
学内で開催された「子ども学科主催の公開講座」、「学内ＮＰＯ法人障害者就業生活支援開発支援センターGreen Work21研修会」、リハビリテーション学研究科フォーラム、の協賛を行い生涯福祉研究科の名称を明記した。

【研究指導の強化】
① 倫理審査の仕組みと申請に関わる講義
修士論文の作成予定の大学院生に倫理審査委員の教員が、倫理審査の仕組みと申請方法を丁寧に説明し、院生自らが申請できるよう情報提供を行った。
② 院生との懇談会の実施
大学院生の学習環境を整備する一環として、デザイン発表や中間発表、修士論文の終了後、計3回、院生と教員が懇談して、学習などに関するインフォーマルな関わりを通して自由に話しを聞く機会の提供を行った。話し合いの結果は、大学教務部大学院担当に伝えて改善を依頼した。
③ ハラスメント対応
院生の修士論文指導などにおいて、ハラスメントと受け取られかねないよう言動に注意すること、入学を許可した院生は、論文指導教員だけではなく、研究科全体で指導する意識を持つことを申し合わせ、ハラスメント防止を意識した議論を行った。

【他研究科との連携】
① リハビリテーション学研究科の授業の聴講
一昨年以降、リハビリテーション学研究科の配慮で、研究法を担当される木下康仁立教大学教授「修正版グランデッドセオリー」の講義を院生・教員が受講できる機会を得ることが出来た。
②□他研究科との時間割情報の共有化
臨床心理士の資格科目との関係から心理学研究科の科目を取得出来るように時間割の調整を行った。また、例年と同様リハビリテーション学研究科と時間割情報を共有し、院生が受講できないことのないよう、また、資格取得に不利益が生じないよう連携して時間割の作成を行っている。

【その他】
①□修了生
今年度は、過年次生を含めて6人の修士論文の提出があり、それぞれ修士論文を発表し、各教員からの質疑を行うとともに、審査を行った結果、全員の修了が認められた。
②□入学試験合格者
今年度の入学試験(第Ⅱ期および第Ⅲ期)において、いずれも外国人留学生3名が受験をしたものの、日本語のコミュニケーション、専門試験のなどの判断をした結果、残念ながら入学者は0名となった。昨年度のように中・高年の社会人などの受験がなく、大学院入試に関して引き続き今後の教育と指導の在り方も検討する必要があろう。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	六波羅詩朗	

（２）今後の課題
【応募者・入学者数の確保】
①生涯福祉研究科の魅力を周知する活動
生涯福祉研究科の魅力を周知する一環として、公開シンポジウムの他に、今年度も公開講義を実施していきたい。新しいパンフレットの作成や大学院のホームページの刷新などを行うことを通して、より具体的に学生、卒業生、院生、他大学、実習施設、地域の社会福祉施設などへ積極的にチラシなどの配布を行いたい。また、目白大学で開催される福祉関連の研修会に協賛するほか、他学科の講演会などにも積極的に連携を取っていきたい。
②学科の卒業生へリカレントの周知
学部学生に対して早い時期から大学院があることを周知する、既卒者へは学科のニュースレターや同窓会報などを通して働きながら大学院へのリカレント教育の強調を推進することがさらに必要となってこよう。このような見地からの視点も含め、入学者の確保につなげる。
③福祉施設と連携して社会人入学者の確保策を検討する
福祉施設に対するアンケート調査と福祉施設運営者にヒアリングをこれまでに行ってきたことを、今後どのように活用できるかについても検討したい。さらに、連携の方法として、大学と福祉施設で連携して福祉施設から職員を派遣できる仕組みを検討する。
④資格のキャリアアップに応える仕組みを検討する
認定社会福祉士認証・認定機構へ認定社会福祉士の資格取得に関わる大学院の科目の認証を複数申請する。また、認定介護福祉士についてもその資格に関わる科目を確認して申請し、院生確保と専門職養成を検討していく。

【大学院教育】
①図書購入費の活用
教員の図書購入の周知が不十分なこともあり、図書費の活用が不十分なことから、図書館の協力を得ながら一層の図書の購入を推進する。
②大学院教育
学部の体制は、今後大きな変化が生じルであろうことを想定して、生涯福祉研究科の基本的な内容を含めて、社会福祉学および保育学の視点から教員の担当科目との調整や新たな小目などの検討をしていくことは急務と考える。さらに、その見地から、教員の研究粗銅体制、カリキュラムの充実、修士論文の在り方、等について検討することが必要である。
③倫理審査のスケジュールの検討及び調整
修士論文の準備段階における倫理審査のスケジュールの時間的ずれが生じており、調査等に関する実際のデータ収集などに必要な倫理審査が時間的に余裕を持って出来るよう、検討が必要である。さらに、新宿及びさいたま岩槻のキャンパスでの時間的距離の関係をどのように調整して行かなければならないかについても課題である。

【研究科組織と運営】
①教員人事
学科によっての教員配置に大きな変化があり、さらに定年などによる退職によって、現在の大学院担当教員の人員及び専門的科目の担当内容が限界に来ている。同時に、元々、各学科の教員が大学院の教員として担当していることを考えると、学部の人事との調整も今後必要となろう。とくに、定年退職者の講義科目の補充については早急の課題として取り組む必要がある。
②研究科会議や役割など、大学院の構成メンバーが、それぞれ役割を担いながら適切な運営を行うことが必要となる。同時に、科目の充実と教員の負担、非常勤講師の年齢などの問題が生じてきており、これらの課題は研究科として至急検討すべき内容である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉専攻
評 価 対 象 年 度		平30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	専攻主任	
	氏　　名	青木 豊	

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ① 教育全般について:福祉というテーマを教育しているが、平成３０年度までは、保育学から老人福祉学にいたる生涯発達の視点を哲学としようとしていた。学生は生涯のある時期の福祉を学習・考察する際、乳幼児から死にいたる発達の側面から学習・考察することを学び、（教員はその哲学の視点をふくんで研究する）。より具体的には乳幼児の虐待、子育て支援、保育学から児童福祉学さらに老人福祉学・介護学などが、系統的に授業として配置されている。この側面は、本研究科が歴史的に保持している特記すべき事項であった。 ② 個別の事項：ｉ）上の哲学に従って、以下の講演および講義を行った。子ども学科主催、生涯福祉研究科協賛　2018年度公開講座（2018年11月10日）により、「新しい記録のあり方の探求ードキュメンテーションの方法と活用ー」というテーマで、日本女子大学　家政学部　児童学科　准教授請川滋大先生に講演をお願いした。また、生涯福祉研究科2018年度公開講義として、2018年11月19日（月）は、「保育士の量的確保と保育の質の確保」の可能性を問う～新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領施行の今～」というテーマで前東京家政大学教授　前目白大学大学院生涯福祉研究科非常勤講師（湘南ケア アンド エデュケーション研究所所長）の増田 まゆみ 先生にお願いした。また、その後では、第2回の公開講義として、 2019年1月16日（水）に 「わたしたちの人権と社会正義について語ろう」というテーマで、前日本社会事業大学大学院教授（本学生涯福祉研究科非常勤講師）北島 英治 先生に講義をお願いした。これらのテーマは福祉とほいくなどの視点が含まれており、学生もこれらに参加し、学んだ。ⅱ）定員を20名から10名にしたのち維持した：現実的であり、個々の学生により充分な指導が可能であった。 （2）今後の課題 ① 上記の教育哲学を大きく離れることが、議論されている。これら哲学的観点を意識した研究を教員はしておらず、修論指導にも生かされていない。概念的には秀逸である反面、教育、研究の実施には大きな影響を与えていない。のみならず、研究科の実質についての広報や院生確保には、かえってマイナスの側面すらある。そこで2つの専攻（人間福祉学、保育学）が独立して発展するように、努めることが話し合われている。 ② このような教育方針の転換に沿って、カリキュラム再編を計画し、院生確保にむけての広報などの活動を行う。 ③ リカレント教育的側面を強化するため、カリキュラムにリーダーシップ論、管理者論、等の授業を加えることを検討する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 個別の指導に加えて教員全体が学生の研究を支援する。年間２回の研究デザイン発表会と中間発表会が行われる。その際、学生は自身の研究について指導教員以外の教員と研究科全体の学生との議論の機会を得る。デザインの洗練化、現実性を高めること、さらには学生の研究についての動機を高める機能がある。 （２）今後の課題 ① デザイン発表会での課題：デザイン発表会で、先行研究のられつで自分の発表時間を使い果たしてしまう学生も多い。デザイン発表や中間発表をより充実してものにするために、事前の個々の指導教員の発表に対する教育をより強化する必要がある。 ② 留学生の日本語能力に対する対策：これまでの努力されてきたが入試時点での留学生の日本語能力にたいする評価をより高める必要がある。また研究科に所属した後も、基本的な福祉概念や用語について学ぶため、いままで以上に学部授業への参加を促す。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ① 公開講座・講義の実行：すでに記したように1年に計４つの公開講座と公開講義を行った。もちろん公開していたため本学科の教育哲学にのっとった公開講座・講義を実行し、地域の福祉職の方々や住民の教育・啓蒙に貢献した。 ② 大学が新宿区と福祉分野で協定を結んでいる。 （2）今後の課題 とくに②の地域連携協定をより生かした、当研究科の貢献が期待される。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ① 生涯福祉という観点から、3学科の教員からなる本研究科が、どのような組織を維持し、改善するかは、重要な課題であり続けている。組織マネジメントの基盤である、すでに述べたように、数回にわたるワーキンググループで話し合いと、数回にわたる研究科会議で、この問題について話し合った。 ② この2，3年に常勤教員が3人退職する。教員の構成を学科の人事と合わせてどのようにマネイジメントするかが、本研究科のこの2，3年の特異的な特記すべき事項となっている。 （2）今後の課題 ① 今後の研究科の方向性の検討：今後大学の学科再編が進むと考えられる。そこで当研究科がどのような方向に向かうのがより生産的かとの課題は大きい。機会あるごとにこの課題にたいして議論を行う。現段階では「2専攻独立的」哲学の上に、運営上の統合（例えばカリキュラム担当教員の配置など）を実行するとの方針である。 ② 上記教員の退職問題が大きな問題である。退職者の多くが人間福祉学科の教員であるために、主に同学科の人事とこの課題は結びついている。この人事について、さらに非常勤教員の採用について、大学当局と、当研究科、人間福祉学科、子ども学科が、連携をとりながら取り組めるかが課題となる。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 特になし

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	言語文化研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	時本　真吾	

(1) 特筆すべき事項

１．教育

・英語・英語教育：修了した学生は無く、入学者も無かったため、在籍者が無い状況である。

・日本語・日本語教育：(a) 社会人院生の需要が高まってきていることを鑑み、土曜および夜間に授業を多く設置するようにし、受け入れ環境を整えた。(b) 修士の学生（1名）が日本語教育学会秋季大会（沼津）で研究発表をおこなった。この準備のために教員、仲間の院生が協力した。(c) 外国人研究者受け入れ：国際交流基金研究フォローシップ採択によりナイダン・バヤルマ氏（モンゴル国立教育大学）の研究指導を行った。また、外国人研究者が授業に参加することで、院生は多くの刺激をうけた。

・中国・韓国言語文化：(a) 中国言語文化分野、韓国言語文化分野ともに、修士の学位を授与するための安定的な体制がそれぞれ維持されている。(b) 中国・韓国研究に軸足を置きつつも、「東アジア」全体を視野に入れた横断的な研究活動を可能とする科目が設置されている。(c) 中期計画では、「東アジア」の視点を拡大する方向性を重視したうえで、「学際カリキュラム」の構成が求められており、今年度はその実施に向けて具体的な策定が進んだ。

２．学生指導

・英語・英語教育：英語・英語教育専攻は多くの教員によって運営されているので、きめ細やかな指導が可能だが、残念ながら、在籍者が無く、特徴を活かせていない。

・日本語・日本語教育：(a) 留学生に対しては、入学願書の要件に日本語能力試験1級または2級を求めることを徹底し、面接試験では簡易版ACT FL　OPIで口頭能力を測定した。その結果、一定の日本語力を持った院生を確保することができ、安定した教育・指導ができるようになった。(b) 教員間で修士論文の基準を明確にした結果、より高いレベルの指導、評価ができるようになった。

・中国・韓国言語文化：(a) 中国言語文化分野から5名、韓国言語文化分野から4名、計9名の学位取得者があった。(b) 遠隔地に勤務する社会人や、体調不良で長期欠席が続く学生に対しても、きめ細やかなフォローアップをおこなった。

３．社会貢献

・英語・英語教育：(a) 専攻教員が国内外の英語・英語教育関連学会、学校法人、社会福祉法人において理事、監事、評議員等として運営に尽力している（3件）。(b) 専攻教員により一般図書が出版されている（1件）(c) 専攻教員により英語教育・言語文化関連図書が出版されている（1件）。(d) 専攻教員により一般市民対象の講演会が行われている（1件）。(e) 専攻教員により海外の学術誌に論文が発表されている（１件）。(f) 専攻教員により国際学会での研究発表が行われている（3件）。(g) 専攻教員により国内学会での研究発表が行われている（2件）。(h) 専攻教員により国内外の投稿論文査読が行われている（3件）。(i) 専攻教員が英語教育に関わる産学連携研究を行っている（１件）。

・日本語・日本語教育：(a) 教員が公益社団法人日本語教育学会の大会委員、常任理事、学会誌編集委員を担当した。(b) 教員が代表をつとめる「学びを培う教師コミュニティ研究会」と上海華東師範大学との共催で、平成30年度12月、日本語教師研修（ラウンドテーブル：上海））を企画・実施した。上海での教師研修は毎年実施しており、当該年度で3年目を迎えた。参加者の中には修了生（留学生が帰国）が参加することもあった。(c) 教員が公益財団法人　日本国際教育支援協会　日本語教育能力試験、試験小委員会の委員を担当し、作問をおこなった。

・中国・韓国言語文化：(a) 所属教員は、それぞれ国内外における講演や著書出版などを通じて、一般市民に向けた研究成果のアウトプットを積極的に展開している。(b) 所属教員が、「韓国語スピーチコンテスト」の審査員、「韓国語検定試験」業務、教職免許更新講習講師などを務めている。

４．組織マネジメント

・英語・英語教育：専攻在籍者が無いため、閉講となる授業が多い。

・中国・韓国言語文化：(a) 中国・韓国両分野ともに、修士論文中間発表会や最終試験の実施が各教員の尽力によって円滑におこなわれている。(b) 今年度も入学試験は滞りなく実施され、定員に相当する入学者を確保することができた。

５．その他

・英語・英語教育：専攻教員による複数の研究課題が科学研究費補助金を獲得している（新規２件、継続３件、但し２件は研究代表者が転出）。

・日本語・日本語教育：教員がお茶の水女子大学において博士論文の外部審査委員を担当した。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	言語文化研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	時本　真吾	

(2) 今後の課題

１．教育

・英語・英語教育：急激な少子化が背景にある現代、研究科での研究成果がキャリアパスにつながらない現状があり、研究科の存在意義が問われている。また、本専攻は、英語関連の大学院が林立する中で、特色を発揮できていないと考えなくてはならない。専攻の人材育成目標を再考する必要がある。

・日本語・日本語教育：長期履修制度を利用することにより、仕事と学業の両立ができることやその他のメリットを広く発信していきたい。

・中国・韓国言語文化：中期計画では、中国言語文化分野と韓国言語文化分野の分離と独立、および博士課程の設置に向けた検討が求められている。

２．学生指導

・英語・英語教育：今後、研究課題が未整理であったり、基礎学力の低い学生を受け入れて行かざるを得ないと予想されるので、より手厚く、慎重な学生指導が求められると予想される。

・日本語・日本語教育：(a) 引き続き修士論文の合格基準や形式などを教員間で点検していきたい。(b) 修士論文の執筆だけを目指すのでなく、学会での発表ができるような指導体制を整えていきたい。

・中国・韓国言語文化：学位授与に値する学生をより多く育成するためにも、学会参加などの積極的な研究発表活動を促す必要がある。

３．社会貢献

・英語・英語教育：専攻教員の社会貢献は堅調と判断できるので、この状態を維持したい。

・日本語・日本語教育：地域に開かれた大学として、大学近郊の公立小学校、教育機関などと連携を図っていきたい。

・中国・韓国言語文化：国内外での社会貢献活動をさらに活発化させるために、引き続き各教員の多角的な学術的発信力が求められる。

４．組織マネジメント

・英語・英語教育：定員の充足に向け、専攻の構成員全員が協力して研究成果を公開し、入試広報活動に貢献する必要がある。さらに研究科の人材育成目標、存在意義を現代的視点から検討する必要がある。

・中国・韓国言語文化：両分野の分離と博士課程設置の実現に向けて、引き続き検討をおこなう必要がある。

５．その他

・英語・英語教育：(a) 留学生が受験しやすいように、入学試験の際の研究計画書、小論文への解答、口頭試問を受験生の希望に応じて英語で行うこととした。(b) 長期履修制度の利点を活かすために、在職証明書の要件（在職証明書以外の書類を提出する場合は一度本学入学センターまで連絡する）を緩和する。(c) 国立大学等の上位校でも、大学院受験をWeb上の情報から決心する場合が少なくないので、院生（修了生）、教員の研究成果をWeb上で積極的に広報したい。

・日本語・日本語教育：目白大学の特徴を生かした博士課程を設置することによって、競合となる他大学院との差別化を図っていきたい。また、博士課程を設置することによって、東南アジアの院生（留学生）のキャリアパスを実現化していきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	英語・英語教育専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	時本 真吾	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・修了した学生は無く、入学者も無かったため、在籍者が無い状況である。 (2) 今後の課題 ・急激な少子化が背景ある現代、研究科での研究成果がキャリアパスにつながらない現状があり、研究科の存在意義が問われている。また、本専攻は、英語関連の大学院が林立する中で、特色を発揮できていないと考えなくてはならない。専攻の人材育成目標を再考する必要がある。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・英語・英語教育専攻は多くの教員によって運営されているので、きめ細やかな指導が可能だが、残念ながら、在籍者が無く、特徴を活かせていない。 (2) 今後の課題 ・今後、研究課題が未整理であったり、基礎学力の低い学生を受け入れて行かざるを得ないと予想されるので、より手厚く、慎重な学生指導が求められると予想される。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・専攻教員が国内外の英語・英語教育関連学会、学校法人、社会福祉法人において理事、監事、評議員等として運営に尽力している（3件) ・専攻教員により一般図書が出版されている（1件) ・専攻教員により英語教育・言語文化関連図書が出版されている（1件) ・専攻教員により一般市民対象の講演会が行われている（1件) ・専攻教員により海外の学術誌に論文が発表されている（１件) ・専攻教員により国際学会での研究発表が行われている（3件) ・専攻教員により国内学会での研究発表が行われている（2件) ・専攻教員により国内外の投稿論文査読が行われている（3件) ・専攻教員が英語教育に関わる産学連携研究を行っている（１件) (2) 今後の課題 ・専攻教員の社会貢献は堅調と判断できるので、この状態を維持したい。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・専攻在籍者が無いため、閉講となる授業が多い。 (2) 今後の課題 ・定員の充足に向け、専攻の構成員全員が協力して研究成果を公開し、入試広報活動に貢献する必要がある。さらに研究科の人材育成目標、存在意義を現代的視点から検討する必要がある。
その他	(1)特筆すべき事項 ・専攻教員による複数の研究課題が科学研究費補助金を獲得している（新規２件、継続３件、但し２件は転出）。 (2) 今後の課題 ・留学生が受験しやすいように、入学試験の際の研究計画書、小論文への解答、口頭試問を受験生の希望に応じて英語で行うこととした。 ・長期履修制度の利点を活かすために、在職証明書の要件（在職証明書以外の書類を提出する場合は一度本学入学センターまで連絡する）を緩和する。 ・国立大学等の上位校でも、大学院受験をWeb上の情報から決心する場合が少なくないので、院生（修了生）、教員の研究成果をWeb上で積極的に広報したい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	日本語・日本語教育専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職名	専攻主任	
	氏名	池田　広子	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・社会人院生の需要が高まってきていることを鑑み、土曜および夜間に授業を多く設置するようにし、受け入れ環境を整えた。 ・修士の学生（1名）が日本語教育学会秋季大会（沼津）で研究発表をおこなった。この準備のために教員、仲間の院生が協力した。 ・外国人研究者受け入れ：国際交流基金研究フォローシップ採択によりナイダン・バヤルマ氏（モンゴル国立教育大学）の研究指導を行った。また、外国人研究者が授業に参加することで、院生は多くの刺激をうけた。 （2）今後の課題 ・長期履修制度を利用することにより、仕事と学業の両立ができることやその他のメリットを広く発信していきたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・留学生に対しては、入学願書の要件に日本語能力試験1級または2級を求めることを徹底し、面接試験では簡易版ACT FL　OPIで口頭能力を測定した。その結果、一定の日本語力を持った院生を確保することができ、安定した教育・指導ができるようになった。 ・教員間で修士論文の基準を明確にした結果、より高いレベルの指導、評価ができるようになった。 （2）今後の課題 ・引き続き修士論文の合格基準や形式などを教員間で点検していきたい。 ・修士論文の執筆だけを目指すのでなく、学会での発表ができるような指導体制を整えていきたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・教員が公益社団法人日本語教育学会の大会委員、常任理事、学会誌編集委員を担当した。 ・教員が代表をつとめる「学びを培う教師コミュニティ研究会」と上海華東師範大学との共催で、平成30年度12月、日本語教師研修（ラウンドテーブル：上海）を企画・実施した。上海での教師研修は毎年実施しており、当該年度で3年目を迎えた。参加者の中には修了生（留学生が帰国）が参加することもあった。 ・教員が公益財団法人　日本国際教育支援協会　日本語教育能力試験、試験小委員会の委員を担当し、作問をおこなった。 （2）今後の課題
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 特になし (2)今後の課題 特になし
その他	(1)特筆すべき事項 ・教員がお茶の水女子大学において博士論文の外部審査委員を担当した。 （2）今後の課題 ・目白大学の特徴を生かした博士課程を設置することによって、競合となる他大学院との差別化を図っていきたい。また、博士課程を設置することによって、東南アジアの院生（留学生）のキャリアパスを実現化していきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	中国・韓国言語文化専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	中国・韓国言語文化専攻主任	
	氏名	胎中　千鶴	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・中国言語文化分野、韓国言語文化分野ともに、修士の学位を授与するための安定的な体制がそれぞれ維持されている。 ・中国・韓国研究に軸足を置きつつも、「東アジア」全体を視野に入れた横断的な研究活動を可能とする科目が設置されている。 ・中期計画では、「東アジア」の視点を拡大する方向性を重視したうえで、「学際カリキュラム」の構成が求められており、今年度はその実施に向けて具体的な策定が進んだ。 (2) 今後の課題 ・中期計画では、中国言語文化分野と韓国言語文化分野の分離と独立、および博士課程の設置に向けた検討が求められている。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・中国言語文化分野から5名、韓国言語文化分野から4名、計9名の学位取得者があった。 ・遠隔地に勤務する社会人や、体調不良で長期欠席が続く学生に対しても、きめ細やかなフォローアップをおこなった。 (2) 今後の課題 ・学位授与に値する学生をより多く育成するためにも、学会参加などの積極的な研究発表活動を促す必要がある。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・所属教員は、それぞれ国内外における講演や著書出版などを通じて、一般市民に向けた研究成果のアウトプットを積極的に展開している。 ・所属教員が、「韓国語スピーチコンテスト」の審査員、「韓国語検定試験」業務、教職免許更新講習講師などを務めている。 (2) 今後の課題 ・国内外での社会貢献活動をさらに活発化させるために、引き続き各教員の多角的な学術的発信力が求められる。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・中国・韓国両分野ともに、修士論文中間発表会や最終試験の実施が各教員の尽力によって円滑におこなわれている。 ・今年度も入学試験は滞りなく実施され、定員に相当する入学者を確保することができた。 (2) 今後の課題 ・両分野の分離と博士課程設置の実現に向けて、引き続き検討をおこなう必要がある。
その他	(1)特筆すべき事項 ・特になし (2) 今後の課題 ・特になし

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	安齋　ひとみ	

（1）特筆すべき事項

【教育課程】

①平成28年度4月に改正した新しい科目について、進捗状況を確認し実施した。

②修士論文の審査体制および評価体制を研究科委員会で審議し、公平な評価ができるよう学位論文審査の主査・副査の配置を調整した。

【学生指導・入学者選抜】

①入学時、および学年進行時（4月）に教務委員より学生便覧による年間行事予定およびコースアウトラインの説明を行い、計画的に論文作成ができるよう指導した。

②入試の受験生を確保するために、入試広報部の協力のもと、入学案内別刷を印刷し、受験希望者個々に届くよう看護系大学、病院、保健所、市町村に送付した。修了生より職場での受験生紹介の相談があり研究科長が相談を受けた。修士論文を指導する教員について学生より相談等が生じた際に、学生の意見を十分聞き、該当教員より指導状況を確認し、その上で新しい担当教員を調整するかどうか丁寧な対応が必要となる。組織マネジメントの部分において、指導する教員の状況を鑑み、学生に不利益が生じないよう調整していく必要がある。

【社会貢献】

①特別講義に修了生が参加できるよう広く周知した。

②看護学研究科修了生の会役員と情報交換し、修了生の会総会時に看護学研究科10年間の動向について講演した。受験生の紹介に繋がった。

【組織マネジメント】

①年度途中で論文指導をする教員を変えてほしいと2名の学生より相談があり研究科長が相談を受けた。新年度より別の教員が学生を担当し指導した。

②研究科の中期計画および前期評価・通年評価について、看護学研究科委員会にて審議し、大学に報告した。

（2）今後の課題

①国立埼玉病院キャンパスの事務室職員体制が変わり、年間計画に沿った教務業務、学生業務の業務に支障が生じていることが課題である。

②看護学部卒業生への周知、看護系専門学術雑誌に学生募集広告を掲載する等、積極的な受験生確保策と、受験しやすい条件を整えていくことが急務である。

③3分野受験生の動向をもとに3分野の今後の方針と課題について早急に3分野長会議を開催し検討を重ねていき、看護学研究科の将来構想を掲げていく必要がある。

④修士論文を指導できる学部教員数の確保が必須であり、学部人事の採用計画に反映させる。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	看護学専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者 (評価単位責任者)	職名	専攻主任	
	氏名	林 慶子	

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 1)特別研究と修士論文の評価者、及びそれぞれの評価方法について検討・実行した。 (ア)修士論文の評価については、「看護学研究科の学位論文評価項目」を作成し院生に周知するとともに公表した。また、評価が公平にできるよう、学位論文審査判定時(面接試験時)の主査・副査の配置を調整した。 (イ)特別研究の評価については、修士論文の評価7割・特別研究の取り組み状況を3割として、指導教員が科目評価することを決定した。 2)平成29年度の倫理審査委員会で、「一部に不十分な研究計画書の提出があった」との指摘を受け、平成30年度は、研究の一連の流れをスケジュールに落とし込み、論文構想発表の質疑を経て研究計画書を補強・修正して倫理審査委員会に提出できるように計画的に指導を行った (2) 今後の課題 1)修士論文の評価項目について、教員から、詳細な評価点を希望する意見があったので、今後、評価点70点の詳細について検討し意見をまとめていく。
学生指導	(1)特筆すべき事項 1)入学時、および学年進行時(4月)に教務委員より学生便覧による年間行事予定およびコースアウトラインの説明を行い、計画的に論文作成ができるよう指導した。 2)長期履修生については、論文指導教員が1年次より計画的な履修を指導してきたが、3年履修から2年履修に短縮申請を行った院生の中に、結果的に修士論文の提出ができず、修了に至らなかった事例があった。 (2) 今後の課題 1)長期履修生については、1年次後半の短縮申請時に、指導教員が学生の力量や論文の取り組み状況を鑑みて短縮可能かどうか、また、短縮した場合の研究スケジュールについて十分に指導する必要がある。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 特になし。 (2) 今後の課題 特になし。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 1)「平成30年度看護学研究科組織運営および教員役割」を4月の研究科委員会で決定し、年間運営した。「見える化」することにより、3分野長会議、教務委員会、学生支援委員会、入試広報委員会など。役割と分掌範囲が明確になり、各教員が動きやすくなったと思われる。実際、修士論文の評価項目作成や、論文構想発表会の時間配分、学位論文審査判定時の主査・副査の配置などについて、各委員会で検討し研究科委員会で決定するなど機能的に動くことができた。 (2) 今後の課題 1)国立埼玉キャンパスの事務室体制が弱体化(常勤職員1名に)したことで、研究科委員会の議題の事前調整、委員会資料の作成、特別講義時の準備などへの事務室の協力が得られ難くなった。教員の本拠地が「さいたま岩槻キャンパス」のため、MUSC事務室との調整に工夫を必要とし、教員の負担が増加している。
その他	(1)特筆すべき事項 1)入試の志願者確保対策として、入試広報部の協力のもと、入学案内別刷を印刷し、受験希望者個々に届くよう看護系大学、病院、保健所、市町村に送付した。 2)受験時の条件を緩和(臨床経験年数を5年から3年と変更、実習病院からの入学生の入学金免除の協定)してきたにも関わらず、受験生確保に繋がらず入学生は4人に留まった(定員15人)。 (2) 今後の課題 1)今年度、入試相談日を随時設定し、仕事を持つ看護職が相談をしやすい体制をとることにした。相談の第一報が新宿の入試担当、若しくは国立埼玉病院キャンパスに入ることが考えられる。いずれに入っても、そこから教員への連絡窓口を一本化することで漏れの無い対応を行っていく。タイムラグが生じてしまう点が危惧される。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	リハビリテーション学研究科
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	研究科長	
	氏　　名	内山　千鶴子	

(1)特筆すべき事項

教育に関しては、欠員となっていた作業療法リハビリテーション分野2名の教員に対して、一人を研究指導教員とし、一人を兼担教員として資格申請し審査に合格し補充した．特定の専門科目に関して、教育を充実するために，非常勤講師による授業の充実を図った．生涯福祉研究科、看護学研究科とのFD科目として，特別教育支援特論、リハビリテーション研究法の一部を指定し、学生も教員も学べる体制を強化した。

カリキュラムにおいては、前年度に実施した学生へのアンケート結果を参考に、学生の利便性を考慮しリハビリテーション心理学をリハビリテーション心理学特論とリハビリテーション実践モデル特論に分離し新設した。修士論文指導において、構想発表会（5月）、中間発表会（11月）、最終発表会（2月）を実施、最終試験に長期履修（3年）生を含む9名の学生が受験したが、8名は試験に合格し修士学位を取得した。1名は次年度に修士論文を再提出し最終試験を受験する予定である。2018年の理学療法士・作業療法士の指定規則の改定に伴い、大学院の教育内容をカリキュラムに活かせるように、カリキュラムの変更を検討した。

研究を促進するため、修士論文指導教員が修了生を引き続き指導し、発表や投稿に繋げ掲載に至っている。

社会貢献としては、リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを10月に開催し、外部講師に東京慈恵会医科大学教育センター長、福島統先生と八雲総合病院リハビリテーション科室長、小岩伸之を招聘して「医療者育成における職業教育の視点」と「職業教育としての臨床実習～臨床教育者は学生に何を見せ、何を伝えるか～」について講演いただいた。50名強の参加者であった。アンケートでは参加者から有意義な講演であったと感想をいただいた。なお、この会で大学院の広報を行い、言語聴覚療法分野の学生が大学院受験へ結びついた。

組織マネジメントとしては、毎月、保健医療学部教授会の前後にリハビリテーション学研究科委員会を開催して（計11回）、情報の共有を図ったが、出席しない教員への対応が問題となった。教務委員と入試広報委員を各学科2名決め、合同で月１～2回委員会を開催し（計12回）、研究科運営に関わる企画立案、推進を担当した。研究科予算の立案、執行について研究科長・専攻主任を補佐する担当教員を置き、また予算関係事務がさいたま岩槻キャンパス庶務部で可能になるよう申請し、認められたので、キャンパスでの予算関係事務が可能になりより円滑な予算執行を実現できた。

その他、受験生確保、入学生の専攻分野のアンバランスの解消を目指して、関東の理学療法、作業療法、言語聴覚療法養成校へ大学院案内を送付あるいは持参して広報した。また、学部の4年生学生へ目白大学の学部、修士課程を修了した方に講演していただき、大学院で学習することの意義を説明した。博士課程進学を希望する学生が存在するため、博士課程への入学希望等に関する調査を継続した。

(2) 今後の課題

① 理学療法士・作業療法士の指定規則の改訂が2018年になされた。専任教員の要件として、教育に関する科目4単位以上の履修が義務付けられた。将来教員を希望する学生のために、教育学の科目を増やすようなカリキュラムの改定を実施する予定である。

② 平成30年度初めて修士論文を合格できない学生が出現した。このことから、修士論文の指導と評価が問題となった。そこで、学生に対して評価の内容が明確になり、学生が何をなすべきか分かりやすいように評価方法を検討する予定である。

③ 公開フォーラムに関してはより広報効果を増し、参加者が増大するようにリハビリテーション関連職種の興味関心を考えた講演内容にする予定である。また、教員FDの場とすることにした。

④ 学生確保のためにも、学部生に大学院の広報を来年も実施する予定である。

⑤ リハビリテーション3分野（理学療法、作業療法、言語聴覚療法）を基盤とした修士課程学生確保と博士後期課程設置に向けた基礎資料を集めることは継続して行う。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	リハビリテーション学専攻
評価対象年度		平成30年度	
記入者（評価単位責任者）	職名	専攻主任	
	氏名	時田　みどり	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ①教育内容の充実を目的として、リハビリテーション心理学特論とリハビリテーション実践モデル特論の２科目を設置した。 ②統計学の授業において、多変量解析のための分析ソフトを使用して授業を行えるようにした。 ③教員資格審査を申請し合格した。来年度から作業療法学リハビリテーション分野２名の教員を迎えた。内１名は研究指導教員、他の１名は兼担教員とした。 （2）今後の課題 ①教員審査を適正に行い、教員の充実をはかる。 ②2019年度の指定規則改正による専任教員の要件を満たすような、教育科目の開設を具体化する。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①修士論文指導において、構想発表会（5月）、中間発表会（11月）、最終発表会（2月）を実施、最終試験を経て長期履修（3年）を含む8名が修士学位を取得した。 ②1年次から実質的に論文指導を開始し、プレデザイン発表会を秋学期（11月ないし2月）に実施した後、「目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」への申請を行った。 （2）今後の課題 ①1年次からの特別研究の指導開始により、1年生からの指導を充実するとともに，2年生との研究的交流を活発にしたい。 ②修士論文の審査過程の不明瞭な点があるので、審査委員会の構成員の選定方法，論文審査における基準項目の明記，論文の評価基準について、研究科の教務・入試委員を中心に検討を進める
社会貢献	1)特筆すべき事項 ①10月21日に、リハビリテーション研究科主催のフォーラムを開催した。厚労省のリハ養成校カリキュラム等改善検討会の委員としても活躍されている福島統先生（東京慈恵会医科大学）と、クリニカル・クラークシップによる臨床教育について経験豊富な小岩先生（八雲総合病院）のお二人にご講演いただいた．50名強の参加者があった． ②上記フォーラムは、生涯福祉研究科・看護学研究科と相互に協賛して実施した。 （2）今後の課題 ①公開フォーラム開催、生涯福祉研究科・看護学研究科との相互協賛は今後も継続して、学部生・院生の教育と共に社会貢献の機会としたい。 ②より多くの参加者を募るためには、フォーラムの周知方法の改善が必要である。 ③2019年度は，高次脳機能のリハビリテーションに関する内容で公開フォーラムを開催する予定である。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①毎月、保健医療学部教授会の後、リハビリテーション学研究科委員会を開催して（計11回）、情報の共有を図った。 ②教務委員会と入試広報委員会は原則合同で月１～2回開催し（計12回）、研究科運営に関わる企画立案、推進を担当した。 ③研究科予算の立案、執行について研究科長・専攻主任を補佐する担当教員を置き、また予算関係事務がさいたま岩槻キャンパス庶務部で可能になるよう申請して、予算執行体制の改善を図った。 ④大学院のホームページを活用して、積極的に大学院行事の公開を行なった。 （2）今後の課題 ①すべての教員が研究科委員会に参加し、活発に議論できるよう方策を検討する。
その他	(1)特筆すべき事項 ①受験生確保を目的として、関連施設でのパンフレット配布や、実習施設訪問時の広報活動を行った。特に、昨年度は目白大卒の本学修士課程修了者が、在学生への広報を積極的に行なった。 ②博士課程についても継続検討した。そのために、博士課程への入学希望等に関する調査を継続して実施した。 （2）今後の課題 ①リハビリテーション3分野（理学療法、作業療法、言語聴覚療法）を基盤とした修士課程学生確保と博士後期課程設置に向けた基礎資料を集める。 ②教務，入試，学生等新宿事務局と連携して学務を進めているが、情報の行き違いや事務処理の遅滞が生じる場合がある．連絡内容に齟齬のないよう、協力体制を整えていきたい。

学 部 ・ 学 科

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	人間学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	人間学部長	
	氏　　名	庄司正実	

(1)特筆すべき事項

【教 育】
①国語力向上のために1年生を対象として日本語検定試験を実施しその後日本語力アップセミナーを実施した。今年度は日本語試験で成績下位の学生にセミナーを実施したが次年度は成績に関係なくセミナー対象者とすることとした。時間割の関係上一部の学科学生がセミナーへの参加が困難であった。
②国家試験のある学科においては試験対策講座を開設した。
③心理カウンセリング学科においては新しい国家資格のため実習支援室を設置し学生実習の充実がはかられた。
④各学科とも国家資格の要件に合わせカリキュラム検討がなされた。
⑤学生対象に学部学科共催の講演会を実施した。
⑥外部業者利用による入学前教育を実施したが、学生からの評判も良く今後も継続する予定である。

【研 究】
①国内雑誌だけでなく国外雑誌へも投稿論文が多くなされ研究活動は盛んにおこなわれた。学部全体として、学会誌44件・紀要30件・その他26件・書籍等出版物46件・学会発表数93件であった。このうち国外は学会誌13件・学会発表9件であった。

【学生指導】
①資格関連の学科では就職率は良かったが、一般就職希望者では就職率がやや低かった。
②学生対象のプロジェクト・行事を定例化し実施した(児童教育学科)。

【社会貢献】
①新宿との提携ににより教員による学校巡回指導や学生ピアサポートによる教育支援活動を継続した。
②それぞれ学科の専門性を生かし福祉施設や教育施設などでボランティア活動を行った。

【組織マネージメント】
①人間学部は所属教員が多いため人事案件も比較的多かったが、およそ予定通りに人事処理をした。
②学部としての活動一貫性のため月2回学科長会議を開催し意思疎通を図った。
③非常勤講師との連携を深めるため、非常勤講師との懇話会を開催した。

(2)今後の課題
【教 育】
①次年度からの新しいＤＰ・ＣＰ・ＡＰに対応した教育内容の検討を継続する。
②学生の学修レベルに差があり学習意欲低下などにならないよう対策をとる。
③国語力など基礎力充実を今後も継続する。
④まなブースの活用法を検討する。

【研 究】
①研究成果は上がっているが研究時間の確保が難しく日常業務の負担について考える。

【学生指導】
①一部にアルバイト過多になっている学生が見られ指導が必要と考えられる。
②心身不調の学生等に対して学生相談室・障がい等学生支援室とも協力の上休学や退学にならないように対応していく。
③一般就職をする学生に対してクラスやゼミを通じてなるべく早い段階から就職支援活動を行う。
④引き続き中退学生を減少させるため教員からきめ細かい指導をする。

【社会貢献】
①教育や研究活動しながら社会貢献活動をするために時間を十分とれるようにする。
②地元新宿区の特徴を考え多文化共生などの視点で地域貢献を考える必要がある。

【組織マネージメント】
①各教員の授業コマ数や学科内業務などに負担差がでないようマネージメントをする。
②教員年齢構成に偏りのある学科もあり適正な教員採用計画を立てていく。

【その他】
①新しく設置される心理学部の学生確保のための広報活動が必要である。
②近年入試動向が変化しており入試対策を学部・学科としてさらに考える必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	心理カウンセリング学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①学科講演会を春学期1回、秋学期1回実施した。春学期については、昨年度大雪のため当日中止となった海保知里氏に再度依頼し、実施した。 1)2018年7月23日：「なぜアナウンサーになりたかったのか」海保知里氏（有限会社ヤマダックス） 2)2019年1月7日：「危機的状況における精神保健医療」蕨明里氏（国境なき医師団精神科医） ②2018年度入学者より、カリキュラム改定による公認心理士養成に必要な科目名等の変更を行った。2020年度に新学部学科のカリキュラム改訂を行う予定であり、2018年度より2年間は「中間カリキュラム」の位置づけとなる。 ③新学部・学科（心理学部・心理カウンセリング学科：仮称）設置に向けて、文部科学省における事前相談、提出書類等の作成の準備を行った。 ④公認心理師養成のための、保健医療、教育、福祉、司法・犯罪、産業・労働の５領域の実習先を開拓し、ゼミ単位で見学実習の試行を行った。 ⑤精神保健福祉士コース4年生の1名については、資格試験不合格であった。次年度4年生となる3名が、本コースの最終学生となる。 ⑥公認心理師養成のための見学実習に対応する実習支援室を設置した。 （２）今後の課題 ①心理学部・心理カウンセリング学科の設置に向け、引き続き準備を進めると共に、入学者確保のための広報活動を進めて行く。
研究	（１）特筆すべき事項 ①学会誌への投稿論文数が昨年に比べ大きく増加し、半数以上は国外誌であった。 ②書籍等出版物については、ほぼ例年同様の成果であった。 ③学会発表件数についても昨年に比べ大きく増加し、国際学会での発表4件を含む41件であった。 ④科学研究費補助金については、研究代表8件、分担研究8件であった。 ⑤特別研究費については、5名が科学研究費申請のための助成を受けた。 ⑥その他の受託研究費獲得は1名であった。 （２）今後の課題 ①研究成果は大きいものの、教員との個別面談では、研究のための時間確保の難しさを述べる教員が多く、引き続き課題である。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①就職内定率は、昨年より低く90.2%であった。特に男子84.0%と低かった。 ②本学科は大学院・専門学校への進学希望者が毎年20%前後であることが特徴的であるが、今年度は6名6%の学生が進学した。 ③卒業者数は98名、卒業延期者は単位不足10名、在学4年未満6名の計16名であった。 ④退学者は18名であった。退学理由は精神的な問題、進路変更、学習意欲の低下がほぼ同数、経済的理由が1名であった。 （２）今後の課題 ①就職活動の支援を、キャリアセンター員の教員を中心に引き続き実施していく。 ②大学院進学希望者については、積極的な進学支援が必要である。また、修士課程は2年間と短いため、その後のキャリア形成について の指導も行っていく必要がある。 ③卒業延期者については、学生個々の事情に応じた対応を早期より、クラス担任・ゼミ担任を中心に引き続き行っていく。 ④心身の健康状態が不良な学生が各学年一定数おり、クラス担任・ゼミ担任を中心に、必要に応じて学科内で情報を共有し、学生相談室や障がい等学生支援室と連携して対応していく必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①ピアサポートの授業では、新宿区と提携し、20名の学生（大学院生4名を含む）が区内の小学校にピアサポーターとして赴き、スクール・カウンセリングの補助を行い学校現場に貢献した。 ②新宿区特別支援教育事業において、3名の専任教員が巡回指導を行った。 ③高校5校について教員による出張授業を行った。また河合塾、東京ビッグサイトにて、教員による広報活動を行った。 （２）今後の課題 ①上記ピアサポート授業を継続する。 ②新宿区特別支援教育事業での巡回指導を継続する。 ③高大連携については、一部授業で実施しているが、今後の課題である。 ④学生のボランティア活動について、どのように動機付け、推奨していくかが課題である。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①教授1名、専任講師3名（うち1名は特任）、精神保健福祉士コース担当特任専任講師1名、助教2名、助手1名が4月より着任した。 ②9月より臨床心理実習支援室が設置され、助教1名、助手1名が新たに採用となった。 ③助教1名が年度末に退職し、後任の公募を行った。 ④新学部・学科設置にむけて、専任講師・准教授を中心に、文部科学省・厚生労働省に提出する書類の作成を行った。 （２）今後の課題 ①新学部・学科設置に向けて、各教員がそれぞれの役割を遂行し、学科長はそのとりまとめ、調整を行う。
その他	（１）特筆すべき事項 ①15名の教員が公認心理師資格試験に合格した。 （２）今後の課題 ①公認心理師資格に関する正確な情報を把握し、在学生、入学希望者、卒業生に対して適切に伝えていくようにする。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	人間福祉学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①30年度は特に学生の学力差が顕著であったため、多くの教員は、授業での工夫を重視し、単位修得に困難を来す可能性なある学生に対して、小テストやレポートによるきめ細かい講義の理解度を確認する工夫を行った。また、入学前教育に外部事業者を活用し効果が得られている。 ②学習困難な学生については、学科会議で意見交換をしている。また、1,2年生は、必修科目の担当教員との間で、単位未修得学生に対する状況の共有化や意見交換を通して、学生の学習上の問題状況への対応を積極的に進めた。各課程に関する状況も同様で、課程の教員間で情報交換を行って、資格取得、および卒業後の進路に役立つよう援助している。 ③障がい学生の教育方法について、学科会議で優先的に教育方法を検討。学科全体の共通認識を持つようにしている。 ④中途退学を防止するためには、教員間の情報共有だけでは解決できないため、授業内容の工夫やカリキュラムの検討も会議で話し合ってきた。 ⑤介護福祉士の教育カリキュラム変更にともない、教務委員と協力し、できるだけ学生に負担のかからないよう構成を組んだ。 （2）今後の課題 ①社会福祉士及び精神保健福祉士の国によるカリキュラム変更に向けて、学びやすい学年配置の問題や必修科目の検討を行う必要がある。 ②できるだけ、学生が単位を落とさず進んでいけるようカリキュラムの検討をしていく必要がある。
研究	（1）特筆すべき事項 ①個別の教員が研究費の公募などへ積極的にチャレンジしている。今回は採択が得られた。継続研究なども積極的に行っている。 （2）今後の課題 ①研究を長期的に見て行うようにし、今後も積極的に、外部からの研究資金導入の機会を通して、チャレンジすることを目標としていく。科目の数や委員の負担の偏りが多く、なるべく考慮して研究体制も確保する必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①学生間の学習レベルの格差が深刻な問題となっており、学習意欲や問題関心をどのように持ってモチベーションを維持していくかが課題である。それにより日常の授業への出席へ促していくのかについて気になる学生について学科会議などで意見交換している。 ②３年及び４年は、専門セミナーや卒論ゼミという集団で個別的な学生の状況を把握し、就職などに関する進路及び学習上の課題のある学生への個別指導を行っている。キャリアセンター協力のもと、就職活動は就職内定率100％確保できた。しかも、福祉の優良施設への就職を多く確保できた。また、公務員合格率を毎年増やしてきている。 （2）今後の課題 ①今後も学生の情報交換とその対策会議を進めて中途退学を防止していく。授業についていけない学生の早期に対応していくことが重要と考えている。また、就職にむけて、資格取得の指導、国試の対策などきめ細やかに対応する必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①各教員は、研究との関わりや実習などでの現場との関係を通して、スーパーバイザーや各種の委員会に参加をしながら、目白大学の教員として社会貢献を行っている。 ②各教員が新宿区や地域の運営委員を担当し社会貢献している。 （2）今後の課題 ①今後、多文化共生など学科全体で取り組むものが必要である。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①人間福祉学科の現在的課題は、入学定員確保の維持と国試合格率の向上である。現在、今回、定員100名に変更しても105名確保できたが、今後も長期に続くとは言えない。国試の合格率も徐々に教員の協力の効果もあり、介護課程は100％合格、社会福祉士も合格率をアップさせた。 ②このような状況に学科としては、全員で協力して取り組む必要があるが、教員の委員や持ちコマの格差があり過ぎる。教員の負担が研究活動を阻害する要因ともなっていた。しかし、学科のカリキュラム検討や障がい学生の対応に取り組む中で教員相互の協力体制が得られてきている。 ③30年度は、国試対策、定員確保、カリキュラム検討の関連で、人間福祉学科としてどのような学科にしていくのかの話し合いを進めていくことができた。 ④学科のＰＲのため、ホームページ、ツイッターを活用し、オープンキャンパスの取り組みに卒業生を起用したり、学生から高校へ手紙を出すなどの取り組みを開始し成果が得られている。 （2）今後の課題 ①定員確保のために、また、合格率アップのために、学科内の委員会のつながりを作る必要がある。学科会議だけをあてにせず、ホームページ担当、ＦＤ担当、入試広報担当、国試担当、学生委員などの連携をとりホームページや、オープンキャンパスや桐和祭などの機会をどのように活用してアピールしていくのかと言うことについて、連携し取り組む必要がある。学科内に地域連携委員や障かい学生委員を配置する予定である。 ②学科の教員が参加して国試対策の講義を展開するや学生の取ってより良いカリキュラム編成について議論しあうことにより、教員の意識改革を図る。
その他	（1）特筆すべき事項 特になし。 （2）今後の課題 ①学科としての現在の課題は、入学者の確保と国試の合格者アップである。入学者についてはオープンキャンパス・桐和祭での対応について、入試、広報との関係を密にしながら行ってきて成果があらわれている。また、国試については、外部事業者の導入によって成果が得られていると考えられる。今後も継続したい。 ②１年生に対して、学生への個別面談などを通して、できるだけ大学生活のスタートに躓かないような対応を行い、また、授業を工夫し、やる気をそがないようにし、退学者の減少につながるようにしていく。 ③障がい学生対応。教育に学科全体で協力していく。 ④国試対策の基本となる国語力を育てていく。 ⑤一人ひとりの学生に向き合い4年間で得られたものを卒業時にも生かせるよう教員との関係作りをしていく。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	子ども学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①国語力の向上のために、1年生を対象に学部が実施した国語力アップセミナーに数名が参加した。時間割を検討すれば参加者の増加が見込まれると考える。 ②公務員講座は今年度も実施したが、しっかり取り組んでいる学生には成果が見られた。 ③教室の物的環境及び人的環境について、保護者からクレームがあった。後ろから椅子をけられる、といったことが頻繁にあるため、学校で授業を受けるのが不安、ということであった。20名以上の学生への聞き取りを行い、机の前後、通路などの狭さが問題として浮かんだ。 （2）今後の課題 ①学力に格差があり、上位と下位の差が大きい。下位の学生の学力向上を目指すのはもちろんだが、上位の学生が大学での学びに不満を持たないような工夫が必要であると考える。 ②教育環境の整備が必要となる点を確認する必要がある。
研究	（1）特筆すべき事項 ①四年制大学となって１０年が経過したため、卒業後の動向を把握するための調査を実施した。ワーキンググループは学科教員６名である。３か年計画で特別研究費を獲得し、１年目の本年度は、アンケートの発送、回収を中心に行い、来年度はインタビューを実施する予定である。 ②倫理審査への申請件数が増えており、倫理審査委員が若手の申請について助言をするなどの体制ができつつある。 （2）今後の課題 ①卒業後の動向調査に関しては、アンケート結果をまとめ、学会で発表を行う必要がある。 ②各教員が研究のための時間を確保できるような体制を作るために、時間割や科目配分などを検討する。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①ピアノの個人レッスン室にて盗難が頻発した。そのため、教員が見回りをしたところ、個人レッスン室の使用状況が良くないことが判明した。見回りをしばらく続けたところ、使用状況が改善の方向に向かってきている。 ②毎朝、4号館入り口付近で教員による挨拶を実施した。保育現場ではしっかりとした挨拶が求められるため、日頃から声を出すことに慣れることができる。また、学生の状況を把握することもでき、学生だけではなく教員側にもメリットがあった。 （2）今後の課題 ①個人レッスン室は外からは見えづらく、見回りをしないとすぐに使用状況が悪化してしまう。今後、児童教育学科とも連携しながら、良い状況を保つ工夫が必要である。 ②経済的な事情からアルバイトを多くしている学生が増加してきている。そのために出席が足りず免許・資格の取得をあきらめる学生が増加傾向にあり、大きな課題である。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①例年通り、近隣園との交流、学生ボランティアの派遣などは多数実施してきた。中井御霊神社の巨大絵馬作成、高齢者施設神楽坂でのワークショップなどは先方から期待されて毎年恒例になってきている。 ②西落合図書館における年２回のイベントは、学生の企画ですべて実施しており好評を博している。その他にも四谷保健センター、ささエえーる薬王子でのボランティアに関しても大変評判が良かった。 ③飛騨高山市からの受託研究を行っている教員がおり、飛騨高山を活性化する方法等、学生も参加して検討している。次年度も継続する。 （2）今後の課題 ①近隣でのボランティアに関しては、今後も積極的に引き受けていくつもりである。 ②継続するために、担当の教員がいた方が良いか、検討していく。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①新しい教員が３名入職したが、３名とも前職の経験を生かしてすぐに学科業務に取り組んでくれた。そのため、大きな混乱はなく１年が経過したと思う。 ②再課程認定及び保育士養成のカリキュラム変更があり、一部の教員にのみ負担がかかってしまっていた。また、企画室や資格支援課との連携において、時折うまくいかないこともあった。 ③学科会議の時間短縮を心掛けたが、ほぼ毎回２時間以上の時間がかかってしまっていた。 （2）今後の課題 ①年度末になり退職願が２名の教員から出たことで、来年度の人事に関する見通しの変更が必要となった。幸い２名とも確保できたので、きちんと新人オリエンテーションを学科でも開催する必要がある。 ②学科内の分掌について、公平かつ適切な役割に配置する。
その他	（1）特筆すべき事項 ①カリキュラム改変については、既存のカリキュラムをできるだけ生かして作成した。新カリキュラムについいては、教員間でも学科FDなどで話し合う時間を設けた。 （2）今後の課題 ①次年度は１年生が新カリキュラムとなるため、特に教科目「図画工作・体育・音楽」が無くなり、新しい科目に変更される。そのため、再履修者の混乱が予想されるので、再履修者が卒業単位を間違いなく取得できるよう、細かいサポートが必要になる。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	児童教育学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特質すべき事項 ①教採関係では、４年生36名が受験し22名が正規合格、５名が東京都期限つき合格（補欠に相当）であった。正規合格者の割合は61.1%、期限つき合格者を加えると75%に達した。正規合格率６割、期限つき合格者を加えての合格率75%は、過去最高であった。 ②桐和祭での一年生プロジェクト企画（10月）、山手ウォークラリー（11月）、年度集会（1月）等の学生主体のプロジェクト型学習・共同学習、教科教育授業での模擬授業の実施によって学生の主体性や深い学びを促す授業が推進され、学びに対する意識の変化が見られてきた。 ③児童教育学科４年生が、学科教員の指導の下、Information Technology & Teacher Education International Conference(国際学会、2019年3月、米国ラスベガス）で研究成果を報告した。学生の渡航費については、学長裁量経費からの助成を頂くことができた。 （２）今後の課題 ①近年、教職以外の就職者の増加など学生の就職意識に変化が見られる。今後は、教職就職者に対する教職への使命感の醸成をはかる教育を一層推進するとともに、非教職就職学生に対するキャリア指導の充実など、学生個々の特性に配慮したきめ細かな指導をはかっていくことが課題となっている。今後は、学科として、非教職就職者に対するFDを継続的に実施し、学科教員のキャリア教育における指導実践力を高めていくことが求められよう。
研究	（１）特質すべき事項 ①大学の出版助成を得て学科編集の学術図書を刊行した。この図書は学科創設１０年を記念して刊行したもので、学科教員全員が参加した。今回の刊行は、学科創設からの研究と教育活動の集大成として位置づけられるものである。 ②正規教員（12名）の論文数は12編（昨年度34編）、書籍刊行数は４冊（同３冊）、学会報告等12回（同13回）であり、昨年度と比べて論文数が減少した。昨年度の論文は教職再課程認定に係わる研究を示すためのエビデンスとしてのものであった。また、今年度は学科内の共著が大幅に増加した。このことが原因となり、論文数の減少に繋がった。このような状況を鑑みるならば、今年度は研究の停滞ではなく、例年と同水準であったと言える。 ③学科会議の中にＦＤ研修会を組み込み、実施した（月1回）。そこでは、教員の研究テーマや研究成果の報告した。この研修会を通じて、各教員の専門分野の研究に対する学科内の相互理解が深まった。 （２）今後の課題 ①今年度の学科教員の獲得した科研研究は４件であった。今後は、さらに学科教員に科研費・外部資金などの獲得を促すとともに、学科教員による共同研究を推進する。そのことを通じて、研究の組織化、高度化、現代化に対応した協働的な研究体制の構築に努めたい。
学生指導	（１）特質すべき事項 ①桐和祭での一年生プロジェクト企画（10月）、山手ウォークラリー（11月）のプロジェクト・行事が定例化でき、学科活動として定着した。 ②児童教育学科４年生が、学科教員の指導の下、国際学会（Information Technology & Teacher Education International Conference、2019年３月、米国ラスベガス）で研究を報告した。学生の派遣に当たっては、学長裁量経費からの助成が得られた. ③ゼミ担任教師の指導の下、多くのゼミで高齢者福祉施設・小学校での演奏活動、公共施設での卒業制作展（新宿図書館）、エコ活動（海ごみの清掃、小学校での啓発授業）が実施されるなど、地域・学校との連携を核とした学生指導が推進され、多大な効果を上げた。 ④SPIS制度の支援を得て、学生主体のミュージカル上演（レミゼラブル、2月11日、佐藤重遠記念館）や、地元図書館での読書推進子育て支援活動が行われるなど、大学から資金の支援を得ての活動が積極的に行われた。大学の支援を生かした学生の社会貢献活動を推進できた。 （２）今後の課題 ①近年、アルバイトへの過度の従事が指摘される。それらの学生には学習意識の低下が見られた。背景には、経済状況の悪化した保護者の増加が考えられる。学生との面談を充実させ、学生の実態把握に努めるとともに、学生に対しての適切な助言を行っていきたい。
社会貢献	（１）特質すべき事項 ①学科教職員の社会貢献関連項目数は38件に達し（昨年度40件）、昨年度と同じく高い水準を維持した。学会・研究会活動や国・行政機関への協力などが顕著であり、個々の教員の専門研究を通じての社会貢献をはたしている。 ②学科及び授業・ゼミでの活動成果の地域への発信・公開（新宿図書館での卒業制作展）、学校や地域福祉施設での演奏活動、ゼミ活動の一環としてのエコ活動など、学科教員が授業・ゼミ活動等を通じて学生を指導して行う地域貢献活動が目立った。 （２）今後の課題 ①今後は、教員や教員が指導した学生による社会貢献を大学ホームページなどを通じて広く広報し、目白大学の社会貢献として喧伝していくことが大切である。 ②研究や学内業務とのバランスの中で、教員各自が社会貢献の時間をどう確保していくかが課題である。
組織マネジメント	（１）特質すべき事項 ①月2回の学科会議を定例化し、教員間の意見統一や協議に努めた。そのことが学生の教採合格率の向上や退学者の減少、学科行事の充実化などに結びついた。 ②学科会議の中に月１回のペースで「学科FD」の時間（20分～30分程度）を設定した。教員各自が自分の専門研究を報告し、学科会議の研修的機能を高めた。 ③障がい学生支援室の協力を得て、2019年度入学の障がい学生に対する入学前相談（10月、12月）や学習支援や指導のありかたを研究・研修するための学科研修会（２月）を実施した。この結果、学科内に障がい学生の指導を円滑化するための組織つくりを進めることができた。 ④４月当初の学科会議で年度計画の提示と分掌・係分担を決めて教員に委嘱することで、学科の業務と各自の仕事を明確化した。また、３月に今年度の反省、次年度の方針・計画を決めるための研修会を開いた。４月の計画立案、年度途中での見直し、３月の総括を行うことで、PDCAサイクルに基づく持続発展的な学科運営を推進することができた。 （２）今後の課題 ①教員構成が60歳代（4人、教授）と40歳以下（８人、准教授・専任講師・助教）の２層に分かれており、50歳代が１人（教授）という状況である。今後の人事計画では、40歳代の教授昇進と、年齢バランスを考えた教員構成の適正化を進めることが課題である。
その他	（１）特質すべき事項 ①児童教育学科創設10周年の記念行事として、人間学部との共催で、公開講座「人間学から見た深い学び」（講演者：多田孝志氏・鯨岡峻氏）を実施することができた（2019年１月27日、佐藤重遠記念館）。当日は、副学長先生をはじめとする教職員、学科旧職員、学科学生、一般参加者など多数の参加者があった。とくに、一般参加者は80名を超える盛況であった。 ②人間学部長の指示・指導のもとで、新しい学科３方針（AP、CP、DP）を策定した。新しい３方針の策定により、新時代に向けての児童教育学科学生の受け入れ・教育・送り出しの指針が明確化できた。そして、今後の学生への教育や指導方針の土台が確立できた。 ③例年と同じく、中野区教育員会との連携に基づく区内小学校での観察実習（2年全員、1週間）を実施することができた。この実習により、学生の教職への動機つけや使命感の育成に努めることができた。 （２）今後の課題 ①今後は、キャリア担当を中心に非教職学生に対する就職指導の体制作りの検討を進め、きめ細かなキャリア教育を推進することが課題である。 ②今後は、教務担当を中心に新学部の向けてのカリキュラム構想案の検討に着手していくことが大切である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	社会学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	社会学部長	
	氏　　名	飛田　満	

(1)特筆すべき事項

＜教育・学生指導＞

○主体的な学び、専門的知識の習得、社会人基礎力の向上をめざして、アクティブラーニング、インターンシップ、社会連携・貢献活動と連動させた教育は、学部全体としても、学科・ゼミ単位においても、フィールド調査、イベント参加、プロジェクト実施等、様々なアプローチで積極的に取り組んだ。

○とくに「遺跡フェスタ」「まち飛びフェスタ」「染の小道」等、本学社会学部「ならでは」のイベント型アクティブラーニングを各方面で実践した。

○アクティブラーニングの取組支援の一環として、社会学部「アッハ！体験」プロジェクトの募集を行い、前年度以上に厳正な審査を経て、9件のプロジェクトを採択した。1月に成果発表会を開催し、学生・教員が多数出席して、活発な質疑応答を行った。

○社会情報学科では企業等から講師を招いてブランド・マーケティング戦略を学ぶ授業を展開、メディア表現学科ではメディア学部の社会連携プロジェクト教育を活用、地域社会学科ではフィールドワークによる現場教育を実践するなど、各学科ともにユニークな教育方針のもと学生の興味や関心を引き出す授業が実践された。

○卒業研究は３学科ともに必修であり、社会情報学科では副査制度の導入と合否判定の厳格化、メディア表現学科では卒業研究審査会、地域社会学科では合同ゼミ中間発表会など、卒業研究の質的向上に努めた。

○スタートアップセミナーにおいてリーダー学生が中心となって学部・学科プログラムを実施し、学部・学科への帰属意識を高め、学生間の親睦を深める点で有意義であった。

○２学科ともに、入学前教育としてのフォローアップセミナーと初年次教育としてのフレッシュマンセミナー・ベーシックセミナーを各学科の特徴を活かす形で開講し、大学生としての自覚を促した。

○学芸員、教員、社会調査士、環境マネジメント実務士等、免許・資格取得のための指導に力を入れた。日本語検定、歴史検定、リテールマーケティング検定、国内旅行業務取扱管理者試験、MOS等、様々な試験・検定受験のための支援を行った。

○授業やゼミ等の機会を積極的に利用して、大学・学部・学科単位のインターンシップへの参加を促した。

○３学科とも障がい等のある学生の支援について、学生課等関係部署との緊密な連携を図りながら、それぞれの学生の実態に適った対応ができるよう尽力した。

○３学科平均の就職内定率は95％弱、就職希望者のほぼすべてが就職先を得た。

＜研究・社会貢献＞

○論文・出版物・学会発表等の件数は、学部全体で均すと教員一人当たり２件程度に相当し、科研費、特別研究費等獲得に意欲的な教員、海外で学会発表を行う教員もいて、学生指導や学内業務に多くの時間が割かれる中、決して十分とは言えないが積極的に研究活動に取り組んでいる。

○文筆家のキン・シオタニ氏を講師に迎え、社会学部講演会『まち歩きとフィールドワーク』を開催した。

○地域社会学科主催により、第11回地域フォーラム『日本人の終活―墓・儀礼・巡礼』を開催した。

○メディア表現学科三上ゼミが中心となって『目白大学新聞』45号、46号を発行した。

○３学科ともに、学会・協会の役員や公共団体等委員を担う教員が多数おり、指導的な立場での社会貢献がなされた。

○３学科ともに、地域連携や産学連携を伴う社会貢献事業に積極的に取り組み、新宿区、落合・中井、神楽坂、目白通り、中央区、戸田市、横浜市、綾瀬市、厚木市、朝霞市等の企業や法人、自治体や市民等との多種多様な連携事業を展開した。

＜管理運営＞

○大学の新３方針（DP・CP・AP）に基づき、社会学部、社会情報学科、地域社会学科の新３方針を策定し承認された。

○大学の第４次中期目標・中期計画に基づき、社会学部の第４次中期計画及び2019年度計画を策定し承認された。

○平成30年4月から暫定的に1年間、社会学部と（社会学部から独立した）メディア学部との合同教授会開催が予定されていたが、教授会構成員から合同開催の是非について指摘があり、検討の結果、社会学部・メディア学部はそれぞれ別々に教授会を開催することになった。これに対応するために、メディア表現学科長が社会学部とメディア学部の両教授会に出席し、両学部間の調整に当たり連携に努めた。

○毎月、社会学部教授会の前に社会学部運営委員会を開催し、学科間の情報共有と、学部内のガバナンスについて意見交換を行い、円滑な学部運営と、教授会と学部長等会議や各種委員会等との調整に努めた。

○学生納付金費目の整理統合に伴う関連規則の改正、目白大学教授会規則の改正等について、教授会構成員から度々疑義・異論が寄せられた。これに対しては学部長が財務部・事務局・学長等に確認し教授会で報告することをもって対応したが、他方で学園規範の制定・改廃をめぐる手続きや意思決定プロセスに関して誤解があるのではないかと思われる発言もあり、結果として堂々巡りの「そもそも論」に多くの時間を費やすことになった。

○社会学部では中期計画実施のための３つのワーキンググループ（教育・資格・社会貢献）と懇談会担当を学部内に配置しているが、各種委員会との連携や学科を越えた連携の点で必ずしもうまく機能していない場合が見られた。

○社会情報学科と地域社会学科で補充人事が行われ、それぞれ２名、若手教員と助手を採用した。

○メディア学部と合同で、社会学部交流会を開催し、非常勤講師と専任教員との交流・意見交換の場、及び社会学部とメディア学部の教員同士の情報交換・共有の場として、非常に有意義な機会となった。

○平成31年度入試は、他大学の入試状況や受験生の進路動向に関する入試広報部の分析を踏まえ、学部の定員管理と学科の入試判定を慎重に行った。入学者数は社会情報学科122名、地域社会学科82名、結果は良好であった。

○社会情報学科では、2021年度施行をめざした新カリキュラム案の策定に向けて新カリキュラム検討チームを学科内に発足させ順調に作業を進めることができた。地域社会学科では、カリキュラム刷新に向けてワーキンググループで検討作業を重ねてきたが、学科内のコンセンサスを得られず当面改訂を見送ることにした。

(2)今後の課題

○新たに策定された学部３方針とそれに基づく第４次中期計画及び2019年度計画の着実な実施に、教育・研究・管理運営の各方面で組織的・効率的に取り組んでいく。

○教育面では、アクティブラーニング、インターンシップ、社会連携・貢献活動と連動させた本学部「ならでは」教育に、引き続き積極的に取り組んでいく。

○学生支援の面では、初年次教育、資格取得、キャリア教育、障がい学生の学修支援等、様々な分野での学生サポートに取り組んでいく。

○研究面では、学生指導や学内業務に時間を割かれながらも、更なる論文作成や学会発表、外部研究費・特別研究費等の獲得などが要請されている。

○社会貢献の面では、すでに多くの実績を残しているが、さらに学科を越え専門を越えた共同研究や研究交流ができないか、検討の余地がある。

○管理運営面では、学科間の連携強化、効果的な情報発信、レジリエントな学生募集など課題が多い。

○メディア表現学科では、最短で行けばあと２年、いかにスムーズに全員無事卒業させていくかが課題である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	社会情報学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①専門系列（ユニット）の選択申告による学習意識を高める指導強化の方策を本年度も継続実施した。 ②卒業研究の質的向上を図るべく、副査制度を取り入れて2年目になるが、合否判定等が厳格化され、適切な指導ができた。 ③フレッシュマンセミナー及びベーシックセミナーは大学全体の方針に即しつつ、学年全体や個別クラス指導等を円滑かつ計画的に運営できた。 ④実学を実務者（企業人）から学ぶ機会としての「現代の社会1（ファッションブランド戦略論）」「フードブランド戦略論」は、企業等の講師を招き、実践的マーケティングを学ぶ機会を展開した。 ⑤フォローアップセミナーを開催した。自宅学習として英語のワークシート、読書感想文、社説の要約を課し、大学においては大学の学びを指導するとともにグループワークを体験させた。 （２）今後の課題 ①2021年度施行を目指した新カリキュラムを次年度中にまとめるよう作業を進める。 ②新カリキュラム策定にあたり、AP・CP・DPとの整合性を検討し、就活などの具体的成果と社会的評価を受ける教育成果が出せるようにする。
研究	（１）特筆すべき事項 ①教員による著書9件、論文5件、国内の学会での発表10件があった。 ②学科の研究及び教育書籍「ソシオ情報シリーズ」第18号『エシカル消費と社会デザイン』を刊行した。 （２）今後の課題 ①教員にとっての十分な研究活動（学会発表・著書及び論文執筆等）の実現を目指したい。 ②対外的研究資金の更なる獲得を目指し、研究活動の充実を図りたい。 ③海外の学会活動等で精力的に研究に励む教員もいるが、全体的に教育活動・学生指導に時間が割かれる現状がある。効率的な学科運営を図り、教員の研究活動に従事する時間の確保を目指したい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①成績・出席不良学生には、学期末にクラス・ゼミ担任のコメントつき成績表を保護者宛に送付した。特に必要な場合は学期末以外でも送付した。 ②3年次生は秋学期後半より、4年次生は1年間を通じて社情就活相談会を週1回実施し、「求人リスト」等資料も週1回発行した。 ③2年次生は春学期中途でクラス担任の面談を実施し、個別指導が手薄となる2年次学生の指導強化と不安等の解消に努めた。 ④「アッハ！体験」プロジェクトに７件応募し、そのうち５件が採択された。学生の主体的な学びを支援することができた。 （２）今後の課題 ①1年次生はベーシックセミナー時・2年次生は担任が個別面談をしたが、さらに可能な限り個別面談等の機会を作り、学生の把握と指導を徹底したい。これらを中途退学者の削減に結びつける策の一つとして重視する。 ②最終の就職内定率は 91.4％であり、昨年度に比べると5,8ポイント減であった。次年度は就職内定率100％を目指し、例年通りキャリアセンター活用を学生に勧めたり、保護者向け就活相談会ではゼミ担当者が保護者面談を行うことに加え、個々の学生の就活状況を教員間で情報共有し、学生への指導を強化したい。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①企業やＮＰＯ法人と産学連携でプロジェクトを実施したゼミや、消費者関連の協会等と連携した事業を行った教員がいた。 ②気仙沼市を中心に東日本大震災復興へのボランティア活動、綾瀬市で行われるている子ども支援の事業、厚木市のイベントの運営補助、ＮＰＯ法人との連携でカワラノギク保全活動、群馬県上野村の「かじかの里学園」との連携事業等学生とともに活発に社会貢献事業に携わる教員が多数見受けられた。 ③学会役員、公的な団体の専門委員、また自治体主催の講演会講師等社会貢献事業に携わる教員が多数見受けられた。 （２）今後の課題 ①ソーシャルデザインユニット等の学びに直結したボランティア活動への参画等、学生を巻き込んだ社会貢献の場をさらに増やしていきたい。 ②社会に提言していく場として、社会学部他学科との連携の下に社会貢献活動の発展を継続検討したい。 ③学生の教育効果とも連動した、社会的な学習成果を社会貢献する視点から検討したい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①一昨年度から新カリキュラム検討チームを学科内に発足し、新たなカリキュラム策定の検討を継続実施した。 ②学科内の共通課題認識、課題提起を得るために、「ソシオシリーズ」刊行を継続できた。 ③新任者2名の採用活動は計画通り遂行され、有望な若手教員及び助手を採用するに至った。 （２）今後の課題 ①新カリキュラムは次年度の完成を目指し、計画的に進めていきたい。 ②今年度は学科FDを１回しか実施できなかったので、次年度は複数回実施するとともに内容の充実を図りたい。 ③教授会等、学部中心の大学運営の改革に連動した学科の組織運営を心がけ、学部・全学の活動にも寄与することを継続する。
その他	（１）特筆すべき事項 ①今年度入試においては入学手続者が122名であり、定員管理の厳格化の影響があるとはいえ好調であった。 ②若手教員が増えたことにより学生の士気も上がり、また学生を巻き込んだ社会貢献活動も活発化した。 （２）今後の課題 ①次年度の入試は定員管理の厳格化によりまだ今年度の傾向が続くと思うが、18歳人口がこれからさらに減少していく中、定員確保を目指して、オープンキャンパス等の学科広報に全力を注ぎたい。 ②学科の全般的な活動において、大学全体の方針や運営に則しつつ、効率化・適正化を検証し、機動的且つ柔軟な学科運営を目指したい。 ③学科の全般的な運営について、より透明性が高く全構成員が課題を共有し共働できる体制を促進・継続したい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	メディア表現学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・河合ゼミの学生4名が「第15回ACジャパン広告学生賞」TVCM部門で審査員特別賞（グランプリ、準グランプリに次ぐ賞）を受賞 ・リアクションペーパーの活用 ・講義とグループワークの相互活用 ・少人数教育、インタラクティブな対話形式授業の実施 ・アクティブ・ラーニングメソッドの活用 ・グループ・ディスカッションやディベートの活用 ・面談のきめ細かな実施 （2）今後の課題 ・課題の工夫、学習意欲の向上への取り組みを行う。
研究	（1）特筆すべき事項 ・学科としては、新学部への移行期にあたり、教員数が少ないところ、実質2名の教員の論文・書籍出版数が計6件であった。 ・科研費については、実質2名の教員の継続課題が5件、申請中の課題が3件であった。 （2）今後の課題 ・一部の教員に研究業績の偏りが見られるが、なるべく全ての教員の研究活動を促進するようにする。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・ゼミごとのきめ細かい就職活動サポート ・きめ細かな面談の実施 ・プロジェクトへの参加奨励 ・インターンシップへの参加奨励 ・出席低迷学生に対するきめ細かな対応、保護者との面談や連携 （2）今後の課題 ・学生の学生生活の意義と目標設定の重要性についての認識を高める。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・各種民間文化講座への年間15回以上の講師 ・公益財団法人への評議員としての貢献 ・地域自治体への研究成果配布によるコミュニケーション強化 （2）今後の課題 ・研究成果を社会貢献にさらに生かすための取り組み
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・少ない教員数で、図書委員会、学生委員会、学生会本部・文化連合会本部の相談員、障がい等学生支援委員会などの委員を務め、学内の業務を担った。 （2）今後の課題 ・現在は新学部への過渡期であるため、本学科教員の人数が今後はさらに減っていく。新学部と協力してさまざまな組織マネジメントに取り組む必要がある。
その他	（1）特筆すべき事項 ・すべての教員がそれぞれの立場からクラス・ゼミ以外にも学生指導をきめ細かく行っている。 ・学科内でインターンシップを奨励し、卒業生による受け入れや毎年継続してかかわりを持つ受け入れ先も増えている。 ・新学部の社会連携プロジェクト教育をメディア表現学科の学生にも応用し、ゼミごとなどで社会連携に取り組ませている。 ・今年度、1名の教員が12月末を以って退職したため、その教員の分は自己点検の内容に入っていない。 （2）今後の課題 ・3月31日時点での過年次生が15名、進級が遅れている学生が3名いるため、今後は学生をいかにスムーズに全員卒業させていくかが課題である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	地域社会学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①合理的配慮を要する障がい学生に対して教育・環境支援に努力した。 ②一方で、上記①に対する無理解・非協力的教員が存在した。 ③入試の多様化と入学定員の厳格化に伴い学生の質の変化が見られ、教育方法等に困惑が見られた。 ④フィールドワークやゼミ活動などで精力的か否か二分化傾向が見られた。 ⑤中退は減少傾向にあるが、学生の主体的な学修意欲の醸成と中間層引き上げの有効策がない。 （2）今後の課題 ①学生課、資格支援課との連絡を密にし、学科として積極的に障がい学生に寄り添う姿勢を確認し実践する。 ②学科会議やFDを通して教員相互の情報の共有化をはかり、法律を含めた高等教育機関における課題を認識し、意識の改善を目指す。 ③初年次教育のとして重点科目を設定し、学生の到達度、理解度がわかる効果的な教育方法を検討実践する。。 ④地域社会学科の学修に応じた教員・学生らの成果を共有化し、発信力を高める仕組みを考えて実践する。 ⑤GPA、IRなど学力定着の推移を数値から常に確認し、「教育の地域」と呼ばれるよう中長期の目標計画を策定する。
研究	（1）特筆すべき事項 ①戸田市政策秘書課との共同研究を継続し、当該地域の調査から政策提言を積極的に行ってきた。 ②学会誌および紀要など毎回成果を出している教員とそうでない教員と二分化している。 ③同じ素材で同じような研究が何年も続き、研究テーマの広がり、展開力の不足が確認できる。 ④ゼミ活動を介した調査研究の成果を報告書など形にしたものが少ない。 （2）今後の課題 ①戸田市の共同研究について学科として共同研究を請ける形に戻し、その中で２～３年単位で担当教員が順次変わる形に変える。 ②論文などの成果を最低年間１本として呼びかけていく。 ③地域フォーラムや教員の発表会を企画して、研究成果を報告して意見交換ができるような機会を設ける。 ④学科予算の編成で報告書作成の経費を計上し、ゼミ単位の調査研究を活性化する。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①基礎学力向上に向けた個別指導などきめ細かい指導が教員個々に見られた。 ②資格取得希望者は入学時は多いが、ドロップアウトする傾向が強く、資格取得に否定的な教員がいる。 ③教育実習の訪問挨拶は、学生のゼミ担当教員が行くことになっているが、特定の教員一人に集中している。 ④クラス担任メンバーが固定化し、学科のコンセンサスもなく、引継ぎも協力もないまま進められている。 ⑤ゼミ活動は、フィールドワーク、共同研究、イベント協力・出展など学科らしい成果を多数出している。 （2）今後の課題 ①家庭、人間関係、基礎学力、心に不安を抱える学生が多いことから、学生のニーズにあった組織的支援体制の構築を目指す。 ②資格や検定はキャリア形成に重要であるので、資格支援課やキャリアセンターと連携を強化して「あきらめない」対策を講じる。 ③資格支援課とも協議し、ゼミ担任の業務としてルールを再確認し、協力を要請する。 ④学科の初年次教育をどのように進めるか検討し、担任のローテーションの在り方を見直す。 ⑤ゼミ運営は教員主導、学生主体等ゼミによって異なるが、双方合意のもと学生が主体的に取り組み、社会に還元できるよう指導する。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①若干名の教員を除いて概ね地域社会学科の教員は、活発な活動を行い、社会貢献に寄与している。 ②新宿区・戸田市等自治体との関係は複数の教員が関与していて、継続的な成果を挙げている。 ③区内のイベント、地元商店街や地区協議会など大学・学科として強固な関係を構築し、協力的で効果的な活動を展開している。 ④学生ボランティア、イベント事業への参加・出展、フィールドワークなど社会との多様な関係が見られた。 （2）今後の課題 ①大学との包括連携協定をどこまで拡大・継続するのか、また誰が引き継ぐのか地域連携・研究推進センターと方向を定める。 ②属人的な関係は否定できず、今後どのような形で関与が可能か検討する。 ③学生サポーターによる支援体制について、イベント毎に募るのではなく、学内組織としてボランティアセンターの設置を目標にする。 ④ボランティアに対する教員・学生相互に意識・理解に違いがあるなか、ボランティア教育を推進することで人材育成につなげる。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①教育・研究に加えて社会貢献に積極的でない教員（助手は含まず）4名、ある程度関与している教員4名、積極的に取組んだ教員3名であった。 ②病気を理由にではあるが、学科業務軽減を訴え、授業や会議などに欠席が多い教員、研究、学科の運営に熱心ではない教員が一部いる。 ③上記②のために、2年１回の役員等改選時の役割分担の異動について特定の教員が固定され、各種委員などローテーションができない。 ④教員同士の信頼関係が損なわれているところもあり会議のスムーズな進行に協力的でない場面が見られた。 ⑤各教員のコマ数のバランスが崩れているので、一部の教員に負担感と不公平感がある。 ⑥成績・実績報告書の内容や自己評価について曖昧さが見られた。 （2）今後の課題 ①教育・研究・社会貢献と高等教育機関に勤務する教員の役割を自覚するよう大学として教員にきちんと発信する。 ②体調不良を訴える教員が複数おり、授業や大学運営に支障が生じていることから学長および学園としての判断を求める。 ③上記の事柄を改善するためにも、教員の適正な業績評価の早期検討が望まれる。
その他	（1）特筆すべき事項 ①学生指導は「育てて送り出す」にふさわしく丁寧で熱心だが、個別指導の手法は教員個々バラバラで、旧態依然の管理指導型。 ②個別指導は自己発案型で自己満足で終わり、大学（学科）全体として教育の質を保証するものではない。 （2）今後の課題 ①学習ポートフォリオを全学（学科）で構築し、学生が記入することでPDCAサイクルを徹底させ、主体的な学びを確立する。 「教育の目白」を具体的に発信する。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	メディア学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	三上義一	

(1)特筆すべき事項

【定員】

メディア学部メディア学科は、平成30年度創設され、学部紹介ホームページ、オープンキャンパス、学部紹介パンフレットなどを通して、メディア学部におけるメディア学の考え方、教学内容及びアドミッションポリシーの説明を行った。その結果、入学定員 140 名に対して 720 名の志願者を集めることができ、入学者数は 148 名となった。文部科学省に認可されたのが１１月だったので定員確保が憂慮されたが、初年度から定員を充足することができた。

【新入生】

4 月授業開始前に、全員参加必須の新入生オリエンテーションを実施し、学部教育の基本的理念、人材育成目的、学部教育の特色などを説明した。加えて、学生便覧、シラバス、時間割等の資料を示し、卒業要件に必要な科目、履修方法、取得可能な資格などについて具体的な説明と質疑応答を行った。

【教育】

１年次配当科目として、「共通科目」と「専門教育科目」を配置している。学部専門科目については、本学部が目指す人材養成の基本理念、学問体系を学生の入学当初に十分に教授する必要があることを踏まえ、学部基礎科目８科目、学部基幹科目７科目を配置している。特に、学生がメディア学の基礎を学ぶために重要となる「メディアと社会」及び「メディア学概論」においては、メディア学を学ぶための基盤となる社会に関する知識をより深く学べるように、シラバスの見直しを行い、内容を充実させた。合わせて、社会のありようやメディアを活用して社会の問題解決や情報発信を行うための技法を身につけさせることを目的とした「メディア情報概論」「メディアとモラル」「メディア技法入門」「造形入門」を配置している。

さらに、１年次春学期に配置されている共通科目の「フレッシュマンセミナー」においては、学部の教育内容をより深く理解させることも踏まえ、グループワークを通してメディア学部に関連するテーマについて調査発表を行うことで、情報を収集・整理・分析する方法やコミュニケーション力、プレゼンテーション技法など、学部において基盤となる能力を身につけさせた。また、各クラス担任との個人面談も交えて、２年次以降の専門的な学びに結びつけた。

また、１年次を対象とした宿泊型集団研修の「スタートアップセミナーの学部別プログラム」においては、学部の教員へのインタビューを行った上でのグループプレゼンテーションなどを課すことで、教員の専門分野を理解し専門学習に結びつけていくことができた。

【施設・設備】

演習室及びメディアワークショップの改修・増設については、当初の計画通り進め、完了した。メディアワークショップについては、演習室と同一の PC を配置し、学生が授業時以外の自主学習ができる環境を整備した。また、サーバーとネットワークの増設についても問題なく進められており、学生の学習環境において支障はない状況である。

（２）今後課題

定員を確保するために、入学志願者を減らさないように広報活動を継続していく。ただ、また誕生して２年目の学部なので、社会一般における知名度は低く、広報活動を拡充していく必要があるだろう。ウェブ、交通広告、雑誌・新聞などを用いて、メディア学部の名を高めると同時に、大学全体のブランド力向上に貢献したい。そのためには明らかに大学からの全面的な支援が必要である。

2 年次以降も上記のような１年次と同様の活動を行い、履修に関する学生の理解の深化を図り、その充実に努めたい。メディア学部はまだAC期間中であり、認可された当初の通りにすべて履行しなければならないので、その枠を逸脱しないように今後も進めていきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	メディア学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・１年次春学期に配置されている共通科目の「フレッシュマンセミナー」においては、学部の教育内容をより深く理解させることも踏まえ、グループワークを通してメディア学部に関連するテーマについて調査発表を行うことで、情報を収集・整理・分析する方法やコミュニケーション力、プレゼンテーション技法など、学部において基盤となる能力を身につけさせた。 ・各クラス担任との個人面談も交えて、２年次以降の専門的な学びに結びつけた。 ・１年次を対象とした宿泊型集団研修の「スタートアップセミナーの学部別プログラム」においては、学部の教員へのインタビューを行った上でのグループプレゼンテーションなどを課すことで、教員の専門分野を理解し専門学習に結びつけていくことができた。 （2）今後の課題 ・２年次の秋学期から「社会連携プログラム」が始まるが、これは一種のプレゼミであり、一般社会と繋がるようなプログラムやプロジェクトが開始される。 ・これはメディア学部では初めての試みであり、その運営のためには学部の全教員の努力が必要である。学生が選択したゼミが、自らの専門分野となり、３・４年も同じゼミに所属することになるため、計画的な履修や活動が求められる。
研究	（1）特筆すべき事項 ・全教員についていることだが、大学の公務が多く、そのための時間を費やしていることが原因となり、なかなか研究に没頭できないでいることが多々ある。 ・それでも内外の学会に出席し、発表などを行っている。科研費にも応募しているが、通ることは容易ではないが、数名の教員が採択されており、今後もその数が増加することを期待したい。 （2）今後の課題 ・会議や公務の数を合理化し、もっと研究に時間を使えるようにすることが急務であろう。 ・研究も当然だが、メディアはやはり制作やクリエーティブな仕事を継続し、社会に発信して認められることも肝要である。そのような努力を今後も続けていきたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・「社会連携プログラム」が始まるので、各ゼミのプレゼン、それから３専門分野の説明を徹底させた。 ・ゼミ選択にあたっては、最低２名の教員と面接しなければならず、十分に納得してゼミを選択させている。 （2）今後の課題 ・２年の秋学科からゼミを開始するのは初めてのことで、今後どのような展開になるのかは未知数であるものの、早い段階から自らの専門分野を選択することの是非を観察し、考えていきたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・社会貢献案件は多く、以下がその例である：新宿未来創造財団「新宿区生涯学習指導者・支援者講習会」によるコーディネーター、NPO地域メディア研究所、ハッピーロード大山商店街フォトスポットの企画制作、東京都文京区、東京大学大学院工学研究科 真鍋研究室（「あなたの名所ものがたり」）、NPO団体こどもDIY部（ペッパーのプログラミング）など。 （2）今後の課題 ・教員全員が何らかの形で社会貢献活動を継続しているが、大学での公務や会議で多忙なため、十分に遂行できないでいることが今後の課題であろう。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・メディア学部は２年目であり、あと約２年半AC期間が続き、その間は組織を変更はできないことになっている。変更があれば、届け出る義務があり、AC期間が終わるまでは現状を維持していかねばならない。 ・その意味でメディア学部の伊藤敏朗教授が退職したことは予想外のことであり、新たに杉原賢彦特任准教授が着任した。 （2）今後の課題 ・AC期間中なので、４年間認可されたままの組織を維持していくことが今後の課題であろう。 ・このまま組織を維持し、その枠を逸脱しないように今後も進めていきたい
その他	（1）特筆すべき事項 ・定員を確保するために、入学志願者を減らさないように広報活動を継続、拡大していきたい。 （2）今後の課題 ・ただ、また開設して２年目の学部なので、社会一般における知名度は低く、広報活動を拡充していく必要があるだろう。 ・ウェブ、交通広告、雑誌・新聞などを用いて、メディア学部の名を高めると同時に、大学全体のブランド力向上に貢献したい。そのためには明らかに大学からの全面的な支援が必要である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	平林隆一	

(1)特筆すべき事項
新カリキュラムが実行された。ここでは従来の経営管理、会計学、マーケティング、ホスピタリティの４コース制を廃止した上で、経営学科の学生が身に付けるべき基本的な科目を必修科目とする。その上で、学生が自分の適性に合わせて、専門科目とさらに進んだ専門科目を自主選択できるようにした。

(2)今後の課題
限られた教員で、幅広い経営学の教育に当たるにおいては、教員の適性配置を考えなければいけない。そのためには、学科の人事組織について見直し、将来に亘って教育・研究が持続できるようにすることが重要である。学生にとって魅力ある授業を提供するためには、教員自らが、質の高い研究を持続的に行う必要があるとともに、若手教員を採用して、教授に昇任するまでの良質な研究・教育環境を提供しなければならない。研究環境においては、研究・教育以外の管理業務の適性な負担を考えるべきであるし、教育面においては、学生に対する教育システム、ソフト、ハードに渡る教育環境を整える必要がある。これに関しては、従来から努力を積み重ねているが、今後とも、恒に学科の課題とならざるを得ない。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	経営学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・２０１９年度から始まるカリキュラムの改訂を行った。 ・ＤＰ、ＣＰ、ＡＰの改訂を行った。 ・２８年度から始めた会計科目の能力別クラスの効果もあり、本年度も多くの日商簿記検定の合格者を出した。 ・ＩＴパスポート、リテールマーケティング（販売士）検定やビジネス法務検定においても多くの合格者を出した。 （2）今後の課題 ・引き続き、簿記、その他の検定合格者の人数を増やす努力を継続するとともに、それ以外の分野においても勉学に対する意欲向上が重要である。 ・２０１９年度からはじまるカリキュラムの改訂を行ったが、時代の変化に対応するため、カリキュラムの継続的検討が望まれる。
研究	（1）特筆すべき事項 ・科研費をはじめとする外部資金を獲得した教員、応募する教員数は多くなかった。 ・論文発表や書籍刊行、学会発表の実績は増加している。 （2）今後の課題 ・各教員が外部資金の獲得を目指す努力を継続することが望まれる。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・退学・除籍となる学生の数は、引き続き減少している（２９年度：３０名、３０年度：２９名）。 ・２９年度に学科から不祥事を起こした学生が出たこともあり、３０年度のオリエンテーション時に生活指導を行った。 （2）今後の課題 ・学生に自分のキャリア形成について深く考えさせて、勉学意欲を高めること、また、退学をさらに減らすことを目的として、今年度から、キャリア教育に強みを持っている専任教員を採用して指導を強化した。具体的な明確な成果がでるまでには時間がかかることが予想されるが、努力を継続することが重要であると考える。 ・入学する学生のレベルは確実に上がっているが、不本意に入学して来る学生も多いため、そうした学生への配慮も必要になっている。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 教員が個々の専門分野をもとに、様々な社会貢献の実績が増えて来た。 （2）今後の課題 学科全体としての教員のチームとして地域との連携を深めるとともに、学生募集に貢献できるようなメッセージとなるような形を模索したい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・マーケティング分野で２名の教員が退職した。 ・前年度に引き続き、国際経営・経営管理分野の教員は募集は行ったが、採用できなかった。 （2）今後の課題 ・教育内容を充実させるために、教員の補充・増員（国際経営・経営管理）が急務である。
その他	（1）特筆すべき事項で ・経営学科は、昨年度に引き続き今年度の入試でも最も多くの受験生があったが、各大学で入学定員管理が厳しくなった影響で３月２５日以降に多くの入学辞退が出たため、思うような入学者数を確保することができなかった。 （2）今後の課題 ・本学の入試では３月２５日以降は合格者を出さないが、他大学では３月２５日以降に合格者を出す大学があるため、入学手続をした合格者から辞退者が出ていしまい、学生の確保が難しくなっている。本学の他の学科と異なり、経営学科は大半の学生を一般入試とセンター試験入試で確保しているため、３月２５日以降にも合格者を出せる仕組みを検討して戴きたい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	外国語学部
評 価 対 象 年 度		平成30 年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	小林　寛	

(1) 特筆すべき事項

【教育】 特筆すべき活動事例は以下のように挙げられる。

（1）前年度策定された学部3方針のもと、学部新カリキュラムが策定された。
①外国語学部及び学部4学科の専門教育を通して達成すべき学修成果（専門基礎力）の具体的な内容が明らかにされた。
②これを達成するための各学科の新専門教育カリキュラムが策定された。
③留学のカリキュラム内での位置付けが明確にされた。

（2）学生一人ひとりを大切にする教育体制の充実が図られた。
①英米語学科では担任・ゼミ教員による「個別指導」に力を入れ、「障がい等学生修学支援委員会」との連携も充実した。
②中国語学科では、学科FDを実施し、学科カリキュラムの策定に建設的な討論を行ない、カリキュラム改定作業を滞りなく進めた。中国語検定試験受験率向上と合格率向上を目指し、また、卒業研究の取り組みの向上を目指した。
③韓国語学科では「きめ細かい学生教育」を実施し、「留学手帳アプリ」導入によって、留学の個別対応の充実を図った。また、卒業研究の充実を図った。
④日本語・日本語教育学科では、3方針との照合、科目の順次性、科目群の有機的つながり・現状のニーズとの適合等の観点から新カリキュラムを策定した。

（3）学部全体で危機管理を考慮しつつ海外協定校との積極的な派遣・受入交流を進めた。
①英米語学科においては、留学派遣先協定校の検討をすすめながら留学を選択科目とすることとした。
②中国語学科においては学生を派遣する提携大学を増やした。
③韓国語学科において、教員による留学先協定校視察を実施し、交換留学、D.D.制度の充実を図った。
④日本語・日本語教育学科においては日本語教育実習(選択必修：3単位)について従来の海外の教育機関、高麗大学校(韓国)、サマビルハウス高校(オーストラリア)とは安定した交流運営を進め、さらに台湾の東呉大学とは大学間協定が締結され台湾研修プログラムが計画実施された。日本語教育センターと連携し協定校からの日本語・日本文化を学ぶ留学生を受入れて丁寧に教育した。

（4）多彩な行事・企画を進めて教育活動を充実させた。
①英米語学科では全国英語プレゼンテーションコンテストに協力した。「キャリアデザイン」ビジネス英語などによる社会との連携教育を進めた。
②中国語学科では、国内最難関とされる「中国語検定試験1級」を取得した学生が2名あった。また、学科学生が「JAL中国語スピーチコンテスト」、台北駐日経済代表処主催「台日交流発表会」に参加し、立正大学経済学部と「中国の歴史」受講生による合同研究発表会を実施した。「国際交流バスツアー」を企画実施した。「第１６回読書推進プログラム」で学科学生１名が特別賞と一等をダブル受賞した。桐和祭に参加して模擬店を出店し成功を収めた。
③韓国語学科では、継続して桐和祭に参加して成果を収め、また学科独自に韓国語学科体育祭・交流会および韓国語学科映画祭を実施した。学科学生組織「SINNARA」の活動を活性化した。関東国際高校との高大連携授業を実施した。
④日本語・日本語教育学科では、都内の日本語学校と連携して学生交流、授業見学、インターンシップへの参加支援を行った。教職希望学生が単位不足により実習を履修できない場合、きめ細かく改善策を立てて対応した。
⑤英米語学科、中国語学科、韓国語学科、日本語・日本語教育学科のそれぞれの留学制度に応じて、学生および保護者を対象とする留学説明会、海外実習説明会を実施した。
⑥社会の第一線で活躍している社会人を講師に迎え特別講座「グローバルナリッジシリーズ」を、引き続き4学科合同で企画・実施した。

【研究】（1）学部全体として著書出版、論文執筆、学会発表に前向きに取り組んでいるなかで、特筆すべき活動事例として、
①英米語学科では継続して科研費採択がなされている。それぞれの教員が所属学会でベストを尽くし、学会論文3件、紀要3件、その他1件、出版物1件、学会発表6件と成果を達成している。
②中国語学科において、書籍出版2件、研究論文掲載数は3件、研究発表数6件、中国語初学者向け教材『スタートダッシュ中国語』を刊行した。
③韓国語学科において、研究論文掲載１件、その他１件、学会発表６件の成果があり、テキスト教材開発も全員で進められている。
④日本語・日本語教育学科の教員が科研費の助成に継続3件が、新規1件が採択された。国際交流基金研究フォローシップ採択により外国人研究者受け入れを実施し研究指導を実施した。学会誌1件、論文集1件、本学紀要3件、他大学紀要2件、学会発表件数17件、海外の研究発表7件と活発な成果があった。

（2）海外での研究発表を着実に実施し、①英米語学科で2件、②中国語学科で１件、③韓国語学科で３件、④日本語・日本語教育学科で7件が挙げられる。

【学生指導】特筆すべき活動事例として、

（1）就職活動に力を入れた。
①英米語学科において、「個別指導」に力を入れた日頃の地道な学生指導により、就職内定率向上の成果を上げている。
②中国語学科は昨年度に引き続き卒業生の就職内定率が100％に達した。
③韓国語学科では実質就職内定率が学内最高であった。
④日本語・日本語教育学科では就職内定率が90％を越える。

（2）個別指導体制を充実した。
①英米語学科では「障がい等学生修学支援委員会」と連携し学生の「個別指導」に力を尽くした。
②中国語学科では「きめ細やかな個別進路指導」を実施している。
③韓国語学科では、個別面談による個別対応を充実した。韓国財団の支援によるインターンシップ生を引続き受け入れた。
④日本語・日本語教育学科では、「障がいのある学生」について専門家や学生課、学科教員と連絡を取り対応した。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	外国語学部
評 価 対 象 年 度		平成30 年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	小林　寛	

【社会貢献】特筆すべき活動事例は
①英米語学科の教員は「日本音声学会評議員」「JALT役員」「大学英語教育学会EAP研究会代表」「全国語学教育学会役員」を務める。学科教員が「千葉市美浜区生涯教育地域連携事業」を推進し、「日本貿易検定試験委員」を務め「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」に協力した。
②中国語学科の教員は「中国語教育学会役員」を2名が、また「歴史人類学会役員」「社会文化史学会役員」「東アジア社会教育研究会幹事」「中国語教授法研究会幹事」を務めた。「高校中国語研究会」に参加し高大連携を進めた。埼玉県内で「中文朋友会」を主催し中国語学習会を実施した。公益財団法人松下幸之助記念財団主催の「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」実行委員を務めた。
③韓国語学科教員は「国際韓国応用言語学会副会長」「韓国日本語学会編集委員」「韓国日本語文学会国際委員」「韓国二重言語学会理事」「日本家庭教育学会理事」を務めた。学科教員が韓国語学科映画祭を開催「李長鎬監督講演会」を主催した。桐和祭で韓国関連展示や韓国料理の販売を支援して韓国文化を広報した。学科教員が茨城県稲敷郡阿見町「ふれあい同好会」にて「韓国文化・韓国文字に表れる韓国語表現」講演会を実施した。つくばみらい市「みらい平コミュニティセンター」主催「韓国語・韓国文化を学ぶ講座」を担当した。学科教員が「目白大学免許更新講習」講師、日本韓国語教育院主催「韓国語スピーチコンテスト」審査委員長、日本韓国人連合会主催「韓国語弁論大会」審査委員長、コミュニティFMラジオ番組「旅するK－POP」番組制作および担当を務めた。
④日本語・日本語教育学科教員が、公益社団法人「日本語教育学会」の大会委員・常任理事・編集委員を、「学びを培う教師コミュニティ研究会代表」「アカデミックジャパニーズ・グループ研究会開催委員」「多文化関係学会学術委員」「JSL漢字学習研究会代表」「小出記念日本語教育研究会編集委員」を務め「異文化コミュニケーション学会」「教育支援協会日本語能力試験」に参加担当し、「お茶の水女子大学博士論文外部審査委員」を担当した。小平市花小金井南講演「古典の会・古典を楽しむ会」を主宰し指導した。目白大学図書館講演「妖怪文化」を実施した。「特定非営利活動法人　みんなのおうち」主催の、外国にルーツを持つ子どもの日本語、教科学習、母語支援活動への学生参加を、学科として支援した。日本語教育センター教員が、落合第三小学校との交流活動において本学学生を引率して交流会活動を実施した。

【組織マネジメント】特筆すべき活動事例とし
(１)定員管理に伴う入試志願者増加傾向がある。
①英米語学科入試で指定校推薦入試の入学者数が増加した。
②中国語学科入試で志願者が増加し継続して定員充足した。
③韓国語学科入試で入試倍率がさらに高くなった。
④日本語・日本語教育学科入試で志願者が増加した。
(２)民主的な学科運営を実施する。
①英米語学科では学科独自の内規「英米語学科教員会議の運営に関する内規」に基づき透明で民主的な学科運営が行われる。
②中国語学科では良好な学科教員協力体制が構築されている。③韓国語学科では毎週の学科会議で教員間の意志疎通が図られている。
④日本語・日本語教育学科では学科教員と日本語教育センター教員が協力して教育に取り組んでいる。

【その他】外国語村の実施が検討がされ立案されて、一部実施されている。

(2) 今後の課題
【教育】
学生の学習研究意欲を向上させ、学生を育てる手立てを工夫し充実する。「個別指導」「きめ細やかな指導」「外国語村」「学科間連携」の諸策を充実する。
【研究】各学科の研究活動の活性化を図るためにも、特に科研費の応募数及び採択数をいっそう増やす努力をする。
【学生指導】実稼働教員一人当たりの担当学生数が60名に迫る学科があり、担当学生数のアンバランスを解消する。
授業支援、留学を念頭に「障がい学生」への対応を充実する。
【社会貢献】研究活動が全般的に今一つ精彩を欠いているので止むを得ないことではありながら、研究成果の社会への還元という面で課題を残す結果となっている。
【組織マネジメント】
①人事の責任体制を明確化し、透明で公正な人事が行われるように予備審査の過程をさらに検証する。
②中国語学科、日本語・日本語教育学科が定員(各40名)を充足することができており、この現状を今後維持するだけでなく、さらなる改善をもたらすべく、外国語学部としてもFDなどで入試動向を検証し協力体制を構築する。
【その他】諸般の事情で、海外留学ができなくなった学生に対してとられる代替措置を、教授会構成員に周知する。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	英米語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ① 時代の要請に応じた教育を実現すべく、新しい３方針の策定を行った。 加えて、養成する能力を具体化・明確化するため専門基礎力の策定を行った。 ② 教職免許法の改正に伴う、新教職課程の課程認定申請を行った。 ③ 新しい3方針に基づくカリキュラム改正を行った。 ④ 語学力を高めるためのセメスター留学(正課科目「Power English」)を実施した。 ⑤ 修学上の問題に対する個別指導を徹底した。 （2）今後の課題 ① セメスター留学について危機管理体制についての検討が必要である。 ② 新しい教育課程の検証をおこなうための検討が必要である。
研究	（1）特筆すべき事項 各教員が、所属学会等において活発な活動を行った。海外の重要な学術誌に論文が掲載された教員もいる。 （2）今後の課題 従来の英語教育・英語学・英米文学を専門とする教員に加え、ビジネス英語など企業社会での豊富な経験を有する教員も存在する。大半の学生が、一般企業に就職する事実を勘案すれば、大変重要な分野である。ビジネス英語担当の教員は、ビジネスで使う英語のみならず、社会での豊富な経験を、「キャリア・デザイン」につなげながら授業を進めている。 学問における理論と実践とのバランスを取りながら、外国語学部英米語学科としての優れた研究の発信を図っていく必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ① 修学上の問題に対する個別指導を徹底した。 ② クラス・ゼミ等を通じて、学生の学校適応を促進するような指導を行った。 （2）今後の課題 特別な配慮を必要とする学生への指導について検討を行う必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 それぞれの教員が、経験の地平を顧慮しながら社会貢献を推進している。英語学・英語教育学・言語学等の学会における役職を務めることはもちろん、中等教育学校、福祉施設、企業など学外の法人と連携して社会貢献を行う者や、資格・検定試験等のスタッフを務める教員がいる。企業と連携した授業を実施することで、社会貢献を教育に還元する活動を行う教員もいる。 （2）今後の課題 社会貢献を教育に還元するための体制づくりについて検討を行う必要がある。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 新しく入職した教員が、本学及び本学科に円滑に適応できるよう、様々な機会を通じた配慮を行っている。 （2）今後の課題 本学科は、専門教育を主とする教員だけでなく、教養教育の担当者も多く在籍しているため、学科の立場からの組織運営と、全学の立場からの組織運営を両立させることが求められる。困難も多いが、学科の専門教育における知見を教養教育に生かすことで全学の英語教育への貢献も果たしていきたい。
その他	今後の課題 あらゆる機会を捉え、英米語学科の学びの魅力を発信し、広報活動の活性化を図りたい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	中国語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①学科学生2名が、中国語力を測る試験としては国内最難関といわれる中国語検定試験1級に合格した。（合格率5.6%、合格者計12名。2019年1月） ②学科学生が2018年度JAL中国語スピーチコンテストに参加した。（2018年12月8日） ③学科学生が台北駐日文化経済代表処主催の「台日交流発表会」（於・台湾文化センター）に参加した。（2018年6月15日） ④立正大学経済学部田中ゼミと「中国の歴史」（選択必修科目）受講生による合同研究発表会を実施した。（2018年12月22日） （2）今後の課題 ①学科学生の中国語検定試験受検率と合格率向上のため、2018年度の成果を踏まえたうえで、さらに指導を強化する必要がある。 ②「卒業研究」（論文執筆・作品制作）において、現状では学生の取り組み方が十分ではなく、質の高い成果が出ているとはいえない。学生の研究意欲を引き出すために、教員の指導上の工夫や充実が求められる。
研究	（1）特筆すべき事項 ①学科教員の研究論文掲載数は3件、書籍出版数は3件、研究発表数は6件であった。2018年度は専任教員（6名）がそれぞれの専門分野で積極的に研究成果をアウトプットすることができた。 ②学科教員3名が共同執筆者として参加し、中国語初学者向け教材を刊行した。（『スタートダッシュ中国語』朝日出版社、2019年） （2）今後の課題 個々の学科教員がより一層積極的に研究活動に取り組み、論文執筆や著書出版、学会発表などで研究成果を公表する必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①卒業生の就職内定率は100%だった。 ②交換留学生と学科学生の交流活動の一環として、「国際交流バスツアー」を企画・実施し、山梨県内を参観した。（2018年10月27日） ③目白大学新宿図書館主催「第16回読書推進プログラム」に学科学生1名が応募し、特別賞と一等をダブル受賞した。（2019年1月23日） ④学科1年次生を中心とした有志が桐和祭に模擬店を出店し、成功を収めた。（2018年10月20～21日） （2）今後の課題 好調な就職内定率を維持するためにも、きめ細やかな個別進路指導を継続する必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①学科教員が「高校中国語研究会」に参加し、大学と高校の中国語教育の情報共有と連携に尽力した。 ②学科教員が、埼玉県内で「中文朋友会」を主催し、市民向け中国語学習会を実施した。 ③学科教員が、公益財団法人松下幸之助記念財団主催の「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」（2018年10月20日、於・東京大学）実行委員として、フォーラム登壇者の選考、登壇者向けプレゼンテーション合宿の参加などに携わった。また、同財団が後援する出版事業（「ブックレット＜アジアに学ぼう＞シリーズ・風響社）において、若手執筆者への助言など継続的な育成支援をおこなった。 （2）今後の課題 自身の研究成果や研究者としてのキャリアを、より積極的に社会に還元しようとする姿勢が各教員に求められる。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科業務全般において、教員間の連携がスムーズにおこなわれており、教育活動面における諸情報を迅速かつ正確に共有できる体制を維持している。 ②入試では、昨年度に引き続き受験生が安定的に増加している。 ③学科FDを実施し、学科カリキュラム改編などの課題について建設的な討論をおこなうことができた。 ④学科の広報活動について、高校への出張授業やfacebookによる情報発信などを積極的に展開した。 （2）今後の課題 長年の懸案であった定員未充足問題については、一昨年度から入試の受験者が増加し、定員充足に近い状態が安定的に維持されている。今後はさらに在学生の学力の質的向上をはかるために、学科教員の良好なチームワークを活かしながら諸対策に取り組む必要がある。
その他	（1）特筆すべき事項 ・カリキュラム改定作業が滞りなく終了した。 （2）今後の課題 ・特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	韓国語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 1、きめ細かい学生教育を実施している。①「韓国語学科体育祭」を実施し、学年を超えた学科学生全体の融和を図った。②「韓国語学科映画祭」を実施し、社会(映画監督招待)と連携した韓国語教育を推進した。③「SINNARA」活動で学科学生のほとんどが「桐和祭」に参加した。④学科学生と交換留学による留学生とを融和させるよう「SINNARA」の活動を活性化させた。 2、留学教育を充実させた。①夏・冬の2回、教員による留学先協定校視察を実施した。②協定校を訪問して、交換留学、D.D.制度、J.D.制度の在り方を検討した。③韓国語学科後援会と連携しながら、春・秋の2回、保護者説明会を実施した。④「韓国語学科歓迎会」「韓国語学科留学歓送会」を実施した。⑤留学関連情報を正確かつ迅速に学生に周知できる「留学手帳」アプリを始動した。 3、卒業研究の充実を図った。①卒業研究中間発表会を「学科全体」で実施した。②卒業研究発表会を全ゼミが「ゼミごと」に実施した。 （2）今後の課題 1、学年全体担任を無くしたことによるBS担任の業務負担、SINNNARAの活動内容、各委員の業務が増加した。 2、業務負担による、助手業務の増加が課題として認識された。 3、卒業研究の指導強化の必要性が論じられた。
研究	（1）特筆すべき事項 1、各教員が著書・論文を鋭意、発表している(1名が発表した)。 2、各教員が学会等で研究発表をしている(5名が発表した)。 3、各教員がテキスト、副教材を開発している(全員)。 （2）今後の課題 1、科研費への応募をさらに進める。 2、研究時間の確保、学会活動の時間確保に課題を感じる構成員が多い。
学生指導	（1）特筆すべき事項 1、韓国語基礎科目の能力別クラスの教育の連携を図った。 2、「フレッシュマン・セミナー、ベーシック・セミナー」「韓国事情」の教育内容の充実を図った。 3、留学教育の充実を図った。 4、卒業研究活動の充実を期した。 5、SA、TAの専門科目教育における学生指導との連携を模索した。 6、SINNARAの活動を支えた。 （2）今後の課題 1、韓国語学科教員の担当授業時間数が多い(半期6コマ担当を基準としながら、全員が半期8コマ以上を抱える)。 2、専門科目担当教員の1教員当たりの担当学生数が50名近い。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 1、「韓国語学科映画祭」を実施し、また「桐和祭」で韓国文化展示や韓国料理の販売をすることで、近隣地域の活動と連携できるとともに、近隣地期の韓国語韓国文化に興味を持つ人々への韓国文化紹介が可能となっている。 （2）今後の課題 1、韓国語学科映画祭への大学からの支援を求めたい。 2、韓国語教育に関する講演会(韓国語教育に従事する教員への教育講座)を設定したい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 （2）今後の課題 1、学部と連携しながら、学科の教員配置の検討を進めたい。 2、助手業務の検討を進める。
その他	（1）特筆すべき事項 1、外国語村の立ち上げを提案し、承認を得ることができ、次年度からの実施となった。とりわけ、韓国語村運用に関する議論を学科全体でおこなってきた。 （2）今後の課題 1、サバティカルが導入された場合の、学科教員の業務を検討しておく必要がある。 2、留学が実施できなくなった場合が生じた際の、科目の代替策を検討しておく必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	日本語・日本語教育学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・台湾・東呉大学との交渉の結果、大学間協定が締結され、東呉大学を軸足とする台湾研修プログラムの計画・実施された。また、来年度、開講する日本語教育実習(選択必修：3単位)の海外実習先として、東呉大学（台湾）も加わり来年度から試行予定である。現在、既に実施している高麗大学校（韓国）、サマビルハウス高校（オーストラリア）については、調整・改善を重ねた結果、安定した運営ができるようになった。 ・外国語学部および日本語・日本語教育学科の新カリキュラム案について、主に①3方針との照合、②順次性、③其々の科目群に有機的な繋がりがあるか、④現状のニーズに合致しているか等の点から見直しを行い、新カリキュラムを策定した。新カリキュラムは来年度から実施されることとなった。 （2）今後の課題 ・日本語教育実習の開設に向けて、これまで準備してきたことを体系化し、事務的な手続きを進めていく予定である。 ・新カリキュラムの実施・運営とともに、カリキュラムの再点検を行っていく予定である。
研究	（1）特筆すべき事項 ・競争的獲得資金（代表）の科研究費助成に継続3件、新規1件が採択された。基盤C「東南アジアにおける「学び合う教師コミュニティ型教師研修」の広がりと継続性の構築」池田広子（継続）、基盤C「海外の日本語学習者と日本語教師のビリーフに関する調査票の新たな開発とその検証」久保田美子（継続）、若手研究「日本語学習者のための漢字学習方法・意識の調査票の開発と多言語化」濱川祐紀代（継続）、若手研究「第二言語としての日本語のリズム習得を目的としたHVPTに関する基礎研究」高橋恵利子（新規）。 ・外国人研究者受け入れ：国際交流基金研究フォローシップ採択によりナイダン・バヤルマ氏（モンゴル国立教育大学）の研究指導を行った。 ・学術誌1本（単1）、論文集1本（単1）、目白大学紀要3本(単3)、他大学紀要2本(共1、単1)が刊行された。 ・海外における国際大会で研究発表（全6件：イタリア、カナダ、ベトナム、タイ）、国内の学会発表（全8件）、海外提携大学との共催による日本語教師研修の実施(1件)、国内教師研修（2件）などが行われた。 （2）今後の課題 ・研究環境および研究ができる時間的余裕を整えていきたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・日本語・日本語教育学科に合致した台湾研修プログラムを立案し、3月に実施した。今後も台湾・東呉大学を拠点として、当該プログラムを継続していくこととなった。 ・都内の日本語学校と連携して、日本語学校の学生との交流、授業見学、インターンシップへの参加の支援を行った。 ・教職希望者のなかで単位不足により、実習を履修できない学生が複数いた。そのため、きめ細かい対応と改善策を立てて対応した。 ・障がいのある学生については、専門家や学生課、学科教員と連絡をとりながら対応にあたった。 （2）今後の課題 ・障がいのある学生への対応について、専門家からの知識や事例を参考にして取り組みたい。来年度は学科FDの検討を計画している。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・岩下教授が小平市花小金井南講演にて古典の会・古典を楽しむ会を主宰、指導にあたった。 ・岩下教授が目白大学図書館にて、「妖怪文化」に関する講演を実施し、民俗学、日本文学の世界の面白さを多くの観衆に伝えた。 ・当該学科の学生が「特定日営利活動法人　みんなのおうち」が主催する外国にルーツを持つ子ども（新宿区）の日本語、教科学習、母語支援活動に参加した。 日本語教育センター教員が落合第三小学校との交流活動において、本学留学生を引率し、日本文化、遊び、給食を共に食べる活動に参加した。 （2）今後の課題 ・新宿区の日本語教育機関や外国人児童生徒が在籍する小・中学校と連絡を取り、大学と地域が協力していきたいと考えている。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・引き続き海外協定校と連携および外国語学部の学科間の連携を強化し、様々な相乗効果が生じることを期待したい。 （2）今後の課題 ・其々の教育の専門分野及び特徴を生かして、学科内の連携を強化していきたい。
その他	（1）特筆すべき事項 ・外国語村の企画・立案について、学科教員と日本語教育センター教員が協力して取り組むことができた。 （2）今後の課題 ・特になし

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	保健医療学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	小林修二	

(1)特筆すべき事項
　3学科の運営を尊重しながら、定期的に学科長会議、国家試験・就職対策委員会、実習教育委員会を開催し、学部として共通理解を図り、協働活動を推進した。2018年度の主な活動は以下の通り。

1.学部教育について
①リハビリテーション教育評価機構による5年に一度の認定調査を受審し、本学部3学科とも優れた教育施設であることが認定された。
②第4次中期計画を策定した。
③退学者数について中退予防対策を実施した結果、過去3年間は、47名→28名→26名と3年連続して減少傾向が続いたが、平成30年度は33名に増加した。
④学部唯一の3学科合同授業である「チーム医療演習」は年々ブラッシュアップされてきており、症例検討の段階からPBL方式が定着した。
⑤中山医学大学との交流協定に基づき、昨年7月8日から約2週間、4名の学生が来日した。本学からは5名の学生が2019年3月13日から2週間訪台した。
⑥学部共通教育がスタートした。初年度としては順調に推移した。
⑦学生数確保
2019年度各学科の入学者数は、理学92名（1.08）、作業48名（0.80）、言語34名（0.85）、学部合計174名（0.94）と理学を除く2学科は定員割れしたが、学部全体では一定の学生数は確保できた。（）内は定員超過率。昨年の結果を踏まえて原因分析と対策を立案したにもかかわらず、2学科は成果を上げられなかった。
⑧実習教育委員会を年6回開催した。内容は実習費予算・決算、実習実施状況、実習施設確保状況、インフルエンザ予防接種、新ユニフォーム選定、実習指導者会議等多岐にわたり、学科間の情報共有と今後の方向性を確認した。
⑨国家試験・就職対策委員会は年5回開催した。平成30年度各学科の国家試験合格率は、理学90.4％（85.8％）、作業70.8％（71.3％）、言語聴覚81.6％（68.9％）と理学・言語聴覚は全国平均を上回り良好な結果であったが、作業は低迷した。（）内は全国平均。就職説明会を理学・作業は8月に開催し、約80の病院・施設が参加した。言語聴覚は10月に開催し、約50の病院・施設が参加した。就職状況に関しては、理学・作業は100％であったが、言語聴覚は96.8％であった。
⑩2020年度入学生から適用される指定規則改正に伴うカリキュラム改定（2019年10月提出予定）のための情報収集と対策を検討した。
⑪学部開設時に購入した教育・研究用設備・備品が老朽化したため、計画的な購入計画案を立案した。
⑫入学前教育をAO入試・推薦入試対象者に適用し、効果を上げた。

2.研究について
科研費助成事業採択結果は、学部として2件、継続課題は7件であった。特別研究費による論文発表や海外学会における演題発表は増加傾向を示した。耳科学研究所を中心とした「めまい治療」に関する多職種連携共同研究が特筆された。
3.社会貢献
①耳科学研究所における耳鼻咽喉科診療、特に難治性めまい診療は全国的にも注目されている。

(2) 今後の課題
①教育の質的向上を今後とも推進する。
②第4次中期計画の着実な実施。
③中退予防の推進。
④中山医学大学との交流促進。
⑤学生数確保。
⑥国家試験合格率の維持向上。
⑦指定規則改定に伴うカリキュラム改定。
⑧科研費等の外部競争的資金のさらなる獲得。
⑨サバティカル研修に向けた派遣者の選考方法の確立。
⑩学部・学科単位のAP・CP・DPの作成。
⑪教養教育の推進。
⑫優秀な教員の確保。
⑬入学前教育の拡充。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	理学療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①OSCEなどの臨床実習に向けた講義や実技指導を多く実施した。 ②国家試験対策特別委員会を発足し、成績不良者に対し特別課題を課すなど、今年度からより積極的に国家試験対策指導を実施した。 ③2018年度は、昨年度よりも国試合格率は大幅に向上し、全体、新卒、既卒のすべてにおいて全国平均を上回った。 ④ディスカッションや小テストの導入などのアクティブラーニングを継続して実施した。 ⑤3年次秋学期に保護者会を開催し、保護者とともに学生への支援を行った。 （2）今後の課題 ①学生の学力に応じた教育方法を検討する。 ②2019年度理学療法士国家試験でも、今年度と同等の合格率を維持する。
研究	（1）特筆すべき事項 ①海外の学術誌に2編が掲載された。 ②国際学会に4演題を発表した。 ③めまいに関する運動療法に関して目白大学耳科学研究所クリニックと引き続き共同研究を実施している。 ④学術学会の常任理事などの役職につき、学術活動に貢献した。 （2）今後の課題 ①科研費などの外部競争的資金を獲得できるように努力する。 ②研究に取り組む教員が固定されているので、多くの教員の研究活動を推進する。 ③大学院教育と学部教員の研究活動を連動させたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①OSCEなどの臨床実習に向けた講義や実技指導を多く実施した。 ②ディスカッションや小テストの導入などのアクティブラーニングを継続して実施した。 ③3年次秋学期に保護者会を開催し，保護者とともに学生への支援を行った。 ④2年次春学期より最低週2コマ以上のゼミでのグループ学習を課しており、学習習慣を付けることができた。 （2）今後の課題 ①中途退学を防止する学生指導法方法を検討する。 ②成績不良学生へのさらなる対策を検討する。 ③2020年度入学生からの指定規則改定に応じた学生指導を検討していく。 ④1年次生に対しても保護者会の開催を検討する。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①理学療法士協会などの専門職団体の活動に複数の教員が参加した。 ②地域の知的障がい児スポーツ事業への参加した。 ③さいたま国際マラソンにおいてランナーケアサポートブースを出展実施した。 ④全国ろうあ者体育大会にケア・ブースを出展活動した。 ⑤複数の市町村における介護予防事業に参加した。 （2）今後の課題 ①様々な社会貢献活動の場を得ることができてきたので、さらにはその質についても高めたい。 ②学生ボランティアやサークル活動の広報活動を行いたい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①新たに国家試験対策プロジェクトを組織した。 ②理学療法に関する指定規則改定に向けて、実習関連対策プロジェクトを組織した。 ③理学療法に関する指定規則改定に向けて、カリキュラム改訂プロジェクトを組織した。 （2）今後の課題 ①一人の様々な会議委員やプロジェクト委員として重複していて業務が重くなっており、その対策も必要。 ②現在の会議等の見直しも検討する。
その他	（1）特筆すべき事項 ①日本空手道連盟ナショナルチーム強化スタッフとして教員が係った。 ②本学科独自の同窓会組織である目白理学療法士会とのFD活動として合同研修会を実施した。 ③本学科卒業生を招聘し、在学生へのセミナーを実施した。 ④3年次OSCEの際に指導者として本学科卒業生を招聘し、在学生と卒業生との連携を促した。 （2）今後の課題 ①さらに本学および本学科のネームバリューを上げるような活動を検討する。 ②指定規則改定後、臨床実習指導者は研修会受講が義務付けられるので、研修会を開催しなければならない。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	作業療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 作業療法学科では開設当初より、臨床実習の方法である診療参加型実習（Clinical clerkship 以下、CCS)を取り入れてきた。30年度、理学療法士・作業療法士の指定規則が改正になり、2020年入学生より臨床実習の形態としてCCS方式がすべての養成施設で適用されることになった。本学の作業療法学科はCCSによる臨床実習の経験とノウハウを持つ作業療法士養成施設として全国の養成施設の指導的な立場になった。また、カリキュラムの改正にあたり、目白大学の作業療法は地域臨床実習、喀痰吸引を含むリスク管理学などもすでに導入されていたため、いくつかの科目を新設、統廃合するにとどまることができた。開設時、また開設6年目のカリキュラム改定は10年先を見越したセラピスト教育として優れたものであったということができる。 （2）今後の課題 CCSを可能にする基盤としての学生の知識の担保を示すために、臨床実習前の共用試験の作成、試行する必要がある。まずは共用試験の2年目の試行を行い、試験内容の検討をすること、臨床実習の成果を図るポストオスキーの充実を図ることが課題である。
研究	（1）特筆すべき事項 作業療法学科の原著論文数は、山田孝教授が退任したことにより減少した。しかし、作業療法学科の科研費採択課題が3件あり、それぞれの作業療法領域の研究が活発に行われている。また作業療法学科では、基礎的・医学的な研究もみられるが、地域でのウエルビーイングを中心とした地域リハビリテーションに対する実践の研究が目立つ。それに加え、臨床実習、CCS、カリキュラムに関する研究が学科内の教員の共同により非常に多く行われている。2018年度の紀要への教育領域の原著も若手の教員を中心に3件投稿されている。また、国際学会発表、スコットランド　クイーンマーガレット大学修士課程作業療法専攻との研究交流なども活発に行われた。倫理審査委員会作業療法部会の担当教員（時田教授・前島教授）のきめの細かい指導により、倫理的な教育および研究方法のブラッシュアップが活発に行われていることも教員の研究能力の向上に大変役立っている。 （2）今後の課題 臨床教育をテーマとした研究の実施、地域に根差した作業療法研究の実施が主たるテーマになると考えている。このテーマは大掛かりな装置や備品を必要としない上に、地域関係者の連携を育て大学地域の持続可能な資源を生みだす可能性が大きい。また学生を参加させることにより教育的効果も大きい。少額の研究費の補助を複数回受けられる機会が増加することを望んでいる。
学生指導	（1）特筆すべき事項 作業療法学科では教員を基礎学年グループ（1.2年生）と専門学年グループ（3.4年生）それぞれのグループがより良い教育を行うために検討し、実践している。また1.2年はクラス担任制度、3.4年はクラス担任に加えゼミ制度を導入し、本人の個性を尊重したきめ細かい指導を行っている。作業療法学科は目白大学全体でも退学者が少ない傾向にある。また、７月には中山医学大学の短期留学生の受け入れ、また3月には本作業療法学科の学生の台湾への短期留学と交流を重ね、学生同士、教員間の顔の見える交流が進んでいる。 （2）今後の課題 作業療法士国家試験の合格率の全国平均も低下しているが、本学もこの2年間は国家試験の結果が振るわない状態が続き、今までの学生指導では国家試験合格率の上昇が難しいと考えられる。1.2年生からの対策が必要と考えられ、その解決策を見出すことが喫緊の課題である。また中山医学大学の短期留学システムの定着および相互の教育・研究の向上に向けて、コンスタントな国際交流を定着させていきたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 作業療法学科では開設当初から明確な地域リハビリテーションへの志向性を打ち出してきた。本年度は各教員が多くの地域連携事業にかかわっており、岩槻地域あるいはそれぞれの関連する地域で、社会貢献・研究・学生指導の3つを兼ね備えた活動を行っている。また仲本教授をはじめとして、作業療法学科では岩槻地域の地域連携事業の中心的な役割を果たし、またそのほかの自治体が運営する委員会・審議会などの長および委員の要請を多数受けており、社会貢献分野で活発に活躍しているといえるだろう。このことは地域リハビリテーションの必要性の増加とともに本学科教員の学識および研究業績が地域社会において必要とされているためと考えられる。 （2）今後の課題 今後も、社会貢献・研究・学生指導が一体として推進できるように大学事務局、さいたま岩槻キャンパス事務局および関係各機関との連携を密にする必要がある。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 2018年度は1名が1年間の休職、1名が8月に急逝したため、実質2名減の体制で業務を行ってきた。そのため、分担する科目担当教員にしわ寄せがいくことが多く、委員会・学科の業務をはじめ、あらゆる業務での人手不足が著しかった。その中でかろうじてではあるが、教育、研究、社会貢献の質を維持してきた。 （2）今後の課題 2019年度末に毛束教授の退職（65歳）がある。毛束教授は教育経験が豊富で、学科の運営の要であったが、後任の作業療法のプロパー教員は補充されないため、精神機能作業療法学領域の講義・演習・臨床実習の役割分担を再構築する必要がある。また同時に教育・研究に熱意のある教授の確保および育成が必要と考えている。2019年就任の花房教授、および准教授らの教育研究能力のさらなる向上、若手教員の研究能力向上を目標に機会の提供、適宜先輩教授からの助言を行っていきたい。
その他	（1）特筆すべき事項 入学志願者数の下降が継続し、2018年度・2019年度と2年間、入学定員を割っている。さいたま岩槻事務局および入試課に協力とアドバイスを要請し、支援をいただいたが、有効な解決策を見出すには至っていない。このことは低成績者を多数入学させることにつながり、一人一人に手厚いサポートを要し、卒業まで何とか学業を継続させても、国家試験に不合格となる可能性の高い学生を多く教育している現状がある。教員が組織的に手厚いサポートをしているが国家試験結果は2年連続で振るわず、国家試験対策も1.2年生から開始することが検討されている。現在はまだそのような状態ではあっても教員は教育・研究・社会貢献に意欲的ではあるが、志願者および学力の向上に有効な解決策を見出すことができなければ、作業療法学科教員の士気の低下、優秀な教員の流出が懸念される。 （2）今後の課題 低成績者に対する特別な対応ではなく、4年間かけて国家試験に合格できる程度の学生の学力の向上が課題であり、その導入を現在検討しており、2019年度は試験的に開始する。オープンキャンパスではそれぞれの教員がバラエティに富んだ企画を実施しているので、来場者が増加すれば入学者につながるため、大学にはオープンキャンパスに多くの高校生が足を運ぶことのできる対策を強く推し進めていただきたい。また学科での独自の取り組みを検討中であり、実施の際には広報活動のマンパワーを中心に、協力をお願いしたい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	言語聴覚学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・1年次生への意欲アップを目指した取り組み。 ・会話能力向上を目的とした段階的指導プログラムの実施。 ・体系化された言語聴覚士国家試験対策指導の実施。 ・3年次生のグループ別学習指導。 （2）今後の課題 ・言語聴覚士国家試験の合格率100％を目標に、国会試験対策指導の見直しを図る。 ・単位不認定学生の減少と中途退学者のさらなる減少を図る。 ・一般教養を身につけさせる取り組み。
研究	（1）特筆すべき事項 ・複数の教員が国際学会で研究発表を実施。 ・特別研究費を用いて、クリニック主催・心理カウンセリング学科教員を講師に招き【慢性めまいの認知行動療法講習会】を開催。クリニック通院中のめまい患者と家族、他大学や医療施設の心理士などが参加し、認知行動療法と前庭リハビリテーションの体験を行い好評を得た。 （2）今後の課題 ・外部競争資金の獲得を増加させる。 ・学科教員の研究業績向上（学科教員全員が、年１本原著論文の筆頭著者、もしくはcorresponding authorになる）。 ・クリニック臨床においては、持続性知覚性姿勢誘発めまいの治療として有効性が報告されている認知行動療法と前庭リハビリテーションに関するプログラムを作成し臨床現場で提供できるように研究を進めて行く必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・1年次から、良識ある社会人となれるよう心構えや社会に通用するマナーについて指導している。 ・担任を中心に各学生の把握に努め、必要な情報はすべての教員で共有している。 （2）今後の課題 ・社会の一員として適切な役割を果たせる人材の育成。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・言語聴覚士の資格を有するすべての教員が目白大学耳科学研究所クリニックでの臨床を実施している。 ・失語症友の会への協力。 ・各種地域交流事業の実施。 ・目白大学耳科学研究所クリニックにおける言語聴覚療法業務。 （2）今後の課題 ・他の埼玉県内の失語症友の会への協力。 ・地域連携偉業の拡大・促進。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・週に1回の学科会議にて学科や学生の課題を共有、議論を経て対応を検討している。 （2）今後の課題 ・教員の負担の軽減。
その他	（1）特筆すべき事項 ・特になし。 （2）今後の課題 ・特になし。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学部
評 価 対 象 年 度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	学部長	
	氏　　名	堤　千鶴子	

(1)特筆すべき事項

【教育】

１）看護学部看護学科の学則（教育課程）改正について、保健師助産師看護師法施行令第13条第1項の規定により、文部科学省に承認された。改正の趣旨は、社会の変化に対応すべく本学の看護学教育内容を見直すことであった。その検討には、「看護学士課程教育におけるコンピテンシーと卒業到達目標」「看護教育モデル・コア・カリキュラム」を主として参考とした。看護系人材として求められる基本的な資質と能力は、①プロフェッショナリズム②看護学の知識と看護実践③根拠に基づいた課題対応能力④コミュニケーション能力⑤保健医療福祉における協働⑥ケアの質と安全のの管理⑦社会から求められる看護の役割の拡大⑧科学的探究⑨障害にわたって研鑽し続ける姿勢である。目白大学看護学部看護学科の特徴を加味しつつ、社会の求める看護系人材の育成のために2019年度からの新カリキュラムを開始する運びとなった。

２）国際交流の目的で教育提携している中山醫学大学への短期留学生として3名の学生及び教員1名を派遣し両国間の交流が得られた。また、帰国後報告会を持ち国際交流への学生への意識付けに効果があった。

３）中途退学者対策は、クラス担任、ゼミ担当、学部の各委員会及び実習担当教員などの連携対策により今年度も成果があった。

４）国家試験（看護師国家試験、保健師国家試験）合格率が全国水準を上回った。就職率は100％であり概ね希望する就職先に就くことができた。

５）障がい者支援対策について、継続して教員間および学生課、保健室との連携のもと支援の不足は生じなかった。

【研究】

１）外部資金獲得及び学会発表・専門誌への投稿数については増加している。

２）国際交流への教員派遣において、両国間で関心ある研究連携へのきっかけを作った。

３）研究環境の整備は、業務改善と直結するため、その改善に向けて特に会議のスリム化について実践した。

４）研究指導協力について実習施設や自治体から依頼された教員派遣について100％協力した。

【組織マネジメント】

１）学科内業務の見直し・点検について、実習関係事務処理の事務部門との連携処理機能を見直し効率化を図った。

２）会議開催の効率化について、特に時間短縮の方法について工夫し実践したが課題は残った。

３）カリキュラム改正のためのプロジェクト会議を立ち上げて、開催を定期的に行い課題を達成した。

（２）今後の課題

【教育】

１）改正カリキュラムと現行カリキュラムの並行運営につき、教育環境と人的配備計画を早期に行う必要がある。

２）厚生労働省による指定規則の改正を視野に入れ、改正カリキュラムの充実を図るとともに厚生労働省の改正案に傾注し対応すべくカリキュラムの充実計画が必要である。

【研究】

１）外部資金獲得推進の継続と環境整備の必要がある。

２）社会貢献を視野にいれた実習施設や自治体から要請される研究協力に積極的に応じていく必要がある。

【組織マネジメント】

１）現状に見合った組織規程の見直しと検討が必要である。

２）実習病院との事務業務の見直しと検討・改善が必要である。

３）業務の合理化とスリム化の検討・改善が必要である。

４）学部内FDの充実が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	糸井志津乃

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・教育方針・内容・方法の一貫性を見直した。具体的には、看護職のコア・コンピテンシーやコア・カリキュラムの視点から科目名、内容、時期および、実習では、時期、施設、内容、指導体制についてである。評価をもとに2019年度のカリキュラム改正を文科省へ申請し、承認を得た。 ・中山医学大学への短期留学として3名の学生を送り、報告会を実施した。 ・災害看護の科目で、岩槻区の防災訓練に学生を参加し、教育効果がみられた。 （2）今後の課題 ・新カリキュラムと現行カリキュラムの併行となるため学生の教育環境を整える。 ・入学生数が予定より多かったため、演習・実習等の学修環境を整える必要性がある。
研究	（1）特筆すべき事項 ・実習施設（埼玉病院、県立精神医療センター等）および自治体（埼玉県看護協会）から依頼された研究指導講師等の教育支援を行った。 ・外部資金獲得への推進を図り増加傾向にある。 （2）今後の課題 ・実習施設および自治体から依頼される教育・研究での連携の機会を推奨する。 ・外部資金獲得への推進を図り、環境を整える。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・看護師国家試験合格率97.1%、保健師国家試験合格率91.3%、就職率100%であった。 ・委員会が中心となって実習環境の学生アンケート結果から教員の学生指導の振り返りを行った。 （2）今後の課題 ・教員の学生指導向上のためのFD教育を検討する。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・実習施設、自治体から依頼される講師等の教育支援の連携を継続し、実習施設等との関係性を維持した。 ・所属学会等の役割を推進し、教員の社会貢献および研究・教育環境を維持した。 （2）今後の課題 ・実習施設から依頼される講師等の教育支援の連携を継続する。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・国公立病院への公文書（実習協定書および依頼）等の事務業務について、効率化・合理化を推進し、修学支援課（実習担当）との協働を図った。 （2）今後の課題 ・開学14年目を迎えたため、学部内での組織運営の現状に見合った規程の改善を図る。 ・教授退職に伴う役割交替の対策を検討する。 ・教員の教育力およびマネジメント力向上のための対策を検討する。
その他	（1）特筆すべき事項 受験者確保のために、以下の内容を強化した。 ・出張授業を積極的に実施した。 ・推薦基準枠の検討と指定校の拡大を図った。 入学前教育として、業者の利用を開始し、受講率が良好だった。 （2）今後の課題 ・入学前教育を継続し、受講科目、回数等の方法について検討する。

別　科

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	別科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	留学生別科
評価対象年度		平成30年度	
記入者　（評価単位責任者）	職名	留学生別科長	
	氏名	久保田美子	

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・新入生及び在学生のレベルチェックテスト(J-Cat)を半年ごと(学期始めと学期終わり)に実施。学生のレディネス調査、および日本語力の伸びを測るために利用した。すべてのクラスでテストの得点に伸びがみられ、学習効果が確実に上がっていることを確認した。 ・文化研修バス旅行(箱根)など、文化体験の機会を設け、学習者の日本への関心を高め、日本文化を理解することを促進した。 ・授業力向上を目指し、非常勤講師を交えた研究会を年2回開催した。 ・例年通り、国際交流課が実施するチューター制度のコーディネートを行い、日本人学生と留学生がより活発に交流できるよう配慮した。 (2)今後の課題 ・特に日本語運用力の低いクラスで、クラス内での日本語運用力の差が大きいため、授業外での補講が必要となる場合があった。チューター制度も活用しているが、より効率的な解決策を考える必要があるものと考える。
研究	(1)特筆すべき事項 留学生別科における教育に関係する研究成果は以下の通りである。 【論文】 ・高橋恵利子(2018)「韓国人日本語学習者のアクセント習得要件について－上級学習者を対象に－」『日本語教育』第169号, pp.16-30. ・鈴木秀明(2019)「パフォーマンス課題に対する多様な視点からの評価-教師評価・ピア評価・自己評価を比較して-」『目白大学人と教育』第13号 ・鈴木美穂(2019)「短期語学研修プログラムにおける日本人学部生の留学生サポートの実践」『目白大学高等教育研究』25号 【発表など】 ・高橋恵利子, 畑佐由紀子(2018)「日本語学習者のアクセント習得－母語, 知覚, モニター, アクセント型の検討－」第二言語習得研究会(鹿児島大学) ・鈴木秀明(2019)「初級前半から始めるポスター発表」(共同発表)筑波大学CEGLOC日本語・日本事情遠隔教育拠点シンポジウム(筑波大学・ポスター) ・鈴木秀明(2019)「文章表現クラスにおける全体レビューの効果-ピアレビューと比較して-」(共同発表)アカデミックジャパニーズグループ研究会(東京海洋大学・ポスター) ・鈴木秀明(2019)「大学院進学前の学生の自発性を育むキャリアデザインの仕掛け」第24回大学教育研究フォーラム(京都大学) ・鈴木美穂(2018)「短期留学プログラムにおける異文化交流の取り組み―日本人学部生の留学生サポートの実践―」日本語教育国際研究大会ヴェネチアICJLE2018 (2)今後の課題 ・研究時間の捻出。・複数の研究課題の並行的遂行および成果発表 ・2021年3月に留学生別科が終了し、交換留学生を中心にした日本語教育プログラムに移行する。新プログラムの開発に向け、プログラム開発にかかわる研究も進めていく必要があるものと考える。
学生指導	(1)特筆すべき事項 学期開始、終了時に各クラスで学生の個別指導を行い、さらに、年2回, 進路指導ガイダンスと追加の個別面談を行った。 その結果、別科生大学進学希望者4名中3名が大学進学(1名は進路変更)、専門学校神格希望者7名全員が進学を果たした。うち1名は本学日本語・日本語教育学科に推薦合格した。 運用力が低いクラスで、文字の習得も不完全な学習者がいたため、個別指導を実施した。 (2)今後の課題 進学希望者に対しては、今後も引き続き、本人の意向を踏まえた上で受験計画を立てさせ, 支援する。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・国際文化交流行事として, 落合第三小学校を訪問した。小学生からは日本の遊びの紹介があった。留学生別科の学生は各母国の遊びなどを披露し、文化交流に貢献した。 ・留学生別科専任講師はそれぞれ日本語教育に関係する学会において役員などの役割を果たし、貢献した。 (久保田美子)日本語教育学会常任理事。学会誌『日本語教育』『言語政策』『社会言語学』査読。 (高橋恵利子)大学日本語教員養成協議会事務局担当。第二言語習得研究会学会誌査読委員。ISI日本語学校グループ主催の『2108年度ISIフェスタ』内の「日本語スピーチコンテスト」の審査委員。 (鈴木秀明)アカデミックジャパニーズ学会担当役員 (2)今後の課題 地域の小学校との国際文化交流行事には引き続き積極的に参加していきたい。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 留学生別科が2021年3月に終了し、同年4月からは交換留学生を中心とした新日本語教育プログラムが実施される。本年度は、その新プログラムの開発作業に着手し、プログラムの大枠をデザインするところまで終了している。専任教員4名は、プログラムデザインに際し、資料収集、分析を行い、時間数、科目名、単位数に関して複数回の打ち合わせを重ねるとともに、関係部署の外国語学部の教員や副学長との調整会議も実施している。 前述の2020年度留学生別科終了決定を受けて、非常勤講師、ならびに他学科への説明を実施し、今後の予定について理解を得た。留学生別科の学生募集は今年度春学期で終了した。終了に先立って、各方面への情報提供を行った。 (2)今後の課題 前述の新日本語教育プログラムの完成に向けて引き続き作業を進める(具体的なカリキュラム, 履修科目設定など)。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2)今後の課題 前述のとおり、引き続き, 新日本語教育プログラムの完成に向けて作業を進める。

付 属 施 設 等

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	地域連携・研究推進センター用評価シート		
評価対象年度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	センター長	
	氏　　名	太原孝英	

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
研究	（1）特筆すべき事項 ①文部科学大臣決定の「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に則り、科研費の使用ルールの見直しを行った。 ②上記ガイドラインと学内規定等に則り、FD研修会において、コンプライアンス教育及び倫理教育を実施。日本学術振興会の研究倫理eラーニングの受講を全学に徹底した。 ③特別研究費の3種目でヒアリングを含む審査を実施した。また、次年度に向けての募集要項の見直しも行った。 ④科研費新規採択者に対して「外部研究資金獲得に伴う追加研究費」を配分した。 ⑤科研費申請手続等説明会において、有識者による「科研費申請のためのポイント」を説明する時間を設けた。 ⑥剽窃チェックツール（iThenticate）を導入し、研究紀要の査読審査や博士論文の審査において利用を促した。 （2）今後の課題 ①利益相反及び知的財産権の取り扱いに関するルールの制定。 ②特別研究費等、学内の研究に関する諸制度の見直し。
地域貢献	（1）特筆すべき事項 ①新宿キャンパスのある落合・中井地区における連携事業も継続し、遺跡フェスタ、染の小道等、地域でのイベントに積極的に係わり、連携を深めた。また、さいたま岩槻キャンパスにおいても、地域交流流しそうめん等のイベントや福祉施設でのボランティアなどを実施した。 ②目白大学発のフリーペーパー『MEJImag（めじマガジン）』VOL3を発行。包括連携協定を結ぶ西武信用金庫全店の店頭等で配付した。 （2）今後の課題 ①包括連携協定の締結により、本学の多種多様な分野の知の資源を生かし、地域が抱えるさまざまな課題に貢献していきたい。ニーズが高い学生ボランティアについては、本学と地域が連携して行われる各種イベントに広く学生を募集し、対応していきたい。
産学連携	（1）特筆すべき事項 ①2018年8月、JSTが主催する「イノベーションジャパン2018」（JST採択制イベント）に1名の教員が出展した。 ②2019年2月「彩の国ビジネスアリーナ2019」に1名の教員が出展した。 ③米屋株式会社とのコラボ商品「ひとくち羊羹」においてはパッケージ作成分の全数（26,430個）を2年間で販売し、2019年3月末で在庫を0とした。 （2）今後の課題 ①マッチングイベント等に出展し、産学連携による様々な事業を展開していきたい。 ②企業との協働、コラボ商品の方向性、参加するイベント等の見直しを行う。
その他	（1）特筆すべき事項 ①6分野の研究紀要を編集・刊行した。 ②「目白大学リポジトリ」を構築・公開した。上記6分野の研究紀要と教育研究所発行の2研究誌に収録された論文の電子データを掲載した。 ③本学の話題性の高い取組み等について、教育担当記者に多く配信される大学プレスセンターを活用しマスコミへの配信を行った。 （2）今後の課題 ①リポジトリの運用方針等の制定。 ②地域連携・研究推進センターの広報について情報発信とその方法の検討が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	心理カウンセリングセンター用評価シート		
評価対象年度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	心理カウンセリングセンター長	
	氏　　名	庄司　正実	

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

1.相談件数
　平成13年開設以降相談件数は漸増している．年間のべ面接件数は平成17年以降1000件以上となり、平成20年以降2000件以上、平成25年以降3000件以上となり、昨年平成30年度は4112件と4000件以上となった.

2.地域貢献活動
　1)公開セミナー：9月29日に全体講座「心理士が知っておきたい抗うつ薬の基礎」、分科会として「在日外国人のこころの理解」「化粧と心理学」「トランスジェンダーと精神分析」「アドラー心理学」「WISC-Ⅳからこども特性と支援を考える」を実施した。参加者は40名であった。
　2)公開講座：12月1日「今家族はどうなっているのか？」　講師 信田さよ子(外部講師)　参加者は124名であった。
いずれも当初の予定通り実施できた。

3.センター内教育活動
　相談員への臨床教育として外部講師および学科教員による事例検討会を4回実施した(6月16日，9月1日，11月17日，2月8日)。第2回と第4回目は外部講師(松木邦裕先生、及川卓先生)を招いて研修を行った。
いずれも当初の予定通り実施できた。

4.大学院生実習環境の整備
　本年度より公認心理師対応カリキュラムとなり大学院生の実習を従来よりも早い段階より始めることとなった。そのため大学院生への指導も十分行うようにした。

(2) 今後の課題
1.相談件数の増加
　相談件数が増えていることは好ましいことではあるが相談に応じきれなくなってきている。特に土曜日の相談希望が多いため場合によっては相談対応できないことが生じるようになった。
　相談数が多くなると相談員の負担も考えなければならない。当施設は大学付属施設であり学生担当ケース以上の過度の相談受理が施設にとって負担となる可能性がある。

2.カウンセリング内容
　現在は個別カウンセリングが主体であるが、今後はグループカウンセリングを実施していくことが学生実習上も好ましいと考えられる。今年度そのための準備をしていく予定である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	教育研究所
評価対象年度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	所長	
	氏　　名	原　克彦	

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

●研究所全体における活動

１：所員会議の実施

○所員会議を年間6回開催した。岩槻キャンパスはSkypeで行った。

○研究所事業・業務の審議決裁及び、公開講座、紀要の発行に関する査読などを実施した。

○会議資料議事録などについては電子化しwebで共有を行った。

２：所報の刊行

○所報『人と教育』を刊行した。

・第13号の特集テーマは「資質・能力とその評価」とした。

・FD部門で実施した公開講座の内容を収録するなど、研究所の諸活動についての実績についても採録した。

●研究部門における活動

１：「プロジェクト研究」の推進

○以下２つのテーマについて定期的にグループ会議を行い、課題の整理や調査の実施などを行った。

・「アクティブ・ラーニング」：教員におけるアクティブ・ラーニングの実態調査を行った。
また、関連する調査研究の他大学例や調査の情報収集を行った。

・「E-learning」：教員におけるE-learningの実態調査を行った。

２：機器貸出しの実施

○iPad、タブレットPCや、プロジェクタ、カメラ、ケーブルなど多岐にわたる内容で貸出しがあった。

○iPadの貸出しが多く、アクティブラーニングやゼミでの活用があった。

３：紀要の刊行

○『目白大学高等教育研究』第25号を刊行した。

●FD部門における活動

１：公開講座の実施

○12月1日（土）にFD実施委員会と共催で公開講座を実施し、所報『人と教育』第13号に内容を掲載した。

２：文献資料の収集

○高等教育に関する文献資料の収集を行った。

●IR部門における活動

１：学内からの依頼に対するIR情報の分析

○学内の各学科学部・各部署からの依頼に基づき、IR部門が保有する入試、学籍、成績等のデータとあわせた分析を行った。

○学内の各学科学部・各部署からのデータ提供とあわせ、IR部門が保有するデータとあわせた分析を行った。

２：各種調査の実施

○「メジアセス」を実施し、入学してきた学生の基本的な学力と意識について調査した。

○卒業生アンケートを実施し、本学の教育などに対する満足度と調査した。

３：高等教育政策に関する動向調査

○高等教育政策に関する文献資料の収集及び研修会などへの参加を通じ、高等教育政策に関する動向調査を行った。

（２）今後の課題

○学長より示された教育研究所事業方針・運営方針を受け、2020年度に向け、教育研究所の改組に向けた取り組みが必要である。
具体的にはWGを設置し、現在の課題の整理と高等教育機能の強化、これらを踏まえた体制等に関する課題の整理が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	メディカルスタッフ研修センター用評価シート		
評価対象年度		平成30年度	
記入者 （評価単位責任者）	職　　名	センター長	
	氏　　名	武田保江	

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①認定看護師教育課程カリキュラム改訂について 日本看護協会認定部通知により平成30年4月から、共通科目において特定行為研修を組み込んだカリキュラム遵守開始となった。（改正理由：認定看護師教育課程修了者が将来特定行為研修を受講する際に教育課程で修めた単位認定のため科目読み替えを可能にする）。改正点は、科目名変更、科目のねらいや学習内容に若干の変更があり、専任教員や担当講師と十分検討した結果、円滑に運用できた。 ②第4回医療機器等開発コンテストを授業の一環として実施した。（平成30年11月6日） 目的：さいたま商工会議所と連携協力し、看護・介護・医療現場の効率化及びQOL向上などを目指した医療機器等の開発を行い、地域医療及び地域産業の活性化等に貢献する。学内外審査委員で構成する第2回審査会を経て、優秀アイデアの表彰式とフィードバックを行った。（平成31年2月19日） 今回は、アイデアを個人ではなくグループ提案形式としたため創意工夫されたものとなり商工会議所会員の高い評価が得られた。 （2）今後の課題 修了生は日本看護協会認定審査（5月）、結果発表（7月中旬）を控えている。休講中の対応は主任教員連絡先を周知し結果を把握する。また、不合格者がでた場合は次年度受験の相談に応じる。
研究	（1）特筆すべき事項 ①「背面開放座位研究」日本脳神経看護研究学会と日本ニューロサイエンス看護学会が診療報酬改正に向けて技術申請を実施しているが、本年度は厚生労働省ヒヤリングで技術実施できる看護師の教育プログラム作成の指導があり、ワーキンググループで作成中である。 要望は、施設基準の追加として、現行「H―001脳血管疾患等リハビリテーション」の人員要件に、450時間以上の専門教育を修了した看護師の配置を追加する。 ②中学校「保健体育」学習に位置づけた脳卒中啓発教育プログラムの実施と評価　―「生きる力」育成に向けた啓発劇を取り入れた教材開発―」を計画した。本学倫理審査委員会の承認を得て、教育プログラム実施校と対照校に介入研究を予定している。本研究には、専任教員と非常勤講師も研究協力者として参加している。 （2）今後の課題 ①の研究のワーキンググループは本学修了生が中心となり、認定看護師が実施する背面開放座位技術を診療報酬に繋げる研究でもある。教育課程が休講･閉講するが修了生とのネットワークを維持しながら研究継続する必要がある。 ②の研究は、本学研心中学を教育プログラム実施校として依頼している。本研究を通して中学と大学との連携･協力関係を深めて行きたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①研修生に安心できる学習環境を提供するため、平成29年度からストーリーテリング手法を用い学習の導入を図っている。新規に『アプリシエイティブ･インクワイアリー（価値の共有）』を取り入れた。看護師人生で最も大切にしている価値、ポジティブコア、より良い状態とは等、グループでストリーを共有しながら、グループ目標達成への行動指針が明確にできた。 （2）今後の課題 休講･閉講に伴い、入学者はいないが、教育課程在学中から大学院進学希望者が数名いる。進学相談への参加を促し、研究分野の担当教員に連絡する。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①脳卒中予防「第6回市民公開セミナー　～ストップ　脳卒中！～」を開催した。実施後アンケートでは、多くの参加者が、脳卒中発症サインを理解し、早期受療行動をとる必要性が理解できたと答え、セミナー開催の目的が達成できた。 （2）今後の課題 「脳卒中予防市民公開セミナー」と「SMAP事業」については、センター教員が学部に異動のため、地域連携･研究推進センターにて継続可能性を検討することとなった。
項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入

組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 「メディカルスタッフ研修センターの2019年度以降の円滑な移行に向けた検討」会議において理事をはじめとする学内教職員と検討してきた。 （2）今後の課題 ①休講･閉講に伴う手続き等はさいたま岩槻キャンパス事務局ならびに埼玉病院キャンバス事務室と連絡を取りながら円滑に進める。 具体的には、認定運営委員会の開催、認定教育課程に関する規定等の改廃について、休講･閉講期間の予算についてなど ②認定看護師教育課程休講･閉講に伴う通知について 研修生募集の停止（HP）、関係諸機関への通知は次の予定で進める。 1) 実習施設には主任教員が実習打ち合わせ時に看護部長、教育担当者に次年度以降の予定を伝える。 2) 非常勤講師には授業で来校時に説明する。 3) 日本看護協会へは、休講の連絡を事務から行うとともに、埼玉県看護協会から教育課程教員会構成員に派遣されている理事に報告する。 4) 2019年度に入り、時期をみて病院長･看護部長、埼玉県看護協会長宛に公文書で報告する。
その他	（1）特筆すべき事項 日本看護協会は認定看護師制度設計を次のように決定した。 現行の教育は、2026年度まで実施する、教育機関認定審査は、2019年度まで実施する。認定審査及び再認定審査は永続的実施する。一方、新たな認定看護師制度について、教育機関の認定審査は2019年度から開始、認定看護師教育は2020年度から開始する。現在の「脳卒中リハビリテーション看護」は、名称が「脳卒中看護」分野となり、特定行為研修を受講すれば「脳卒中看護認定看護師」を名乗る事ができる。 （2）今後の課題 認定看護師教育課程は日本看護協会の認定制度のひとつである。教育課程閉講になるが、埼玉県看護協会との関係は維持していきたい。 （入学式や修了式には埼玉県看護協会長が、教員会には理事に出席を依頼していた）